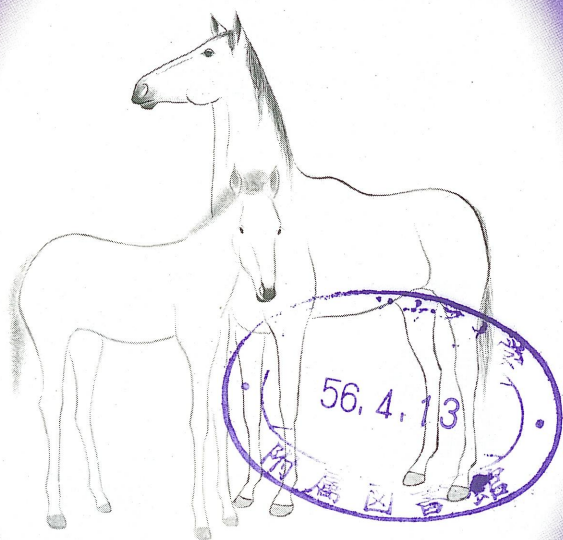


幼児の教玄月



5

第八十卷第五号
日本幼稚園協会
家庭・保育所・幼稚園

バラエティに富んだフレーベル館の

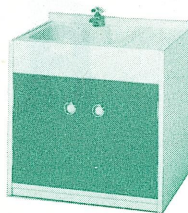
せいかつあそび遊具

新製品



キッチンセット

実生活に対応した新しい生活遊具です。幼児の体位に合った寸法に設計されており、使いやすいように随所に細かな配慮がなされています。ごっこ遊びが楽しく、ワイドに展開でき、遊びの中で自然に社会性を育てます。



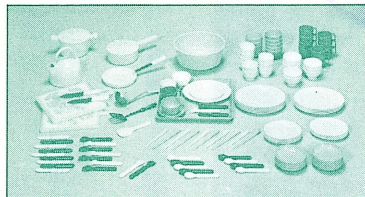
流し台
37,000円

●本体：フラッシュコアボード 流し部：ABS樹脂 蛇口・給・排水ホース各4m、ゴミ受け付。水道につないで、実際に水が使用できます。キャスター付。



オープンレンジ
38,500円

●本体：フラッシュコアボード 2連式ガスレンジとオープンガー一体となっています。ツマミをまわすと着火したように見える構造です。(実際の火はつきません。)



食器セット
1セット32,900円

●両手鍋・片手鍋・やかん・洗い桶・おぼん・お玉・フライ返し・しゃもじ・フライパン各1。まな板・包丁各2。茶碗・汁椀・大皿・中皿・小皿・湯のみ・カップ・スプーン・フォーク・ナイフ・箸各10。プラスチック製



食器棚36,500円

●本体：フラッシュコアボード 幼児の体位にあわせて無理なく出し入れできるように設計されています。

●ほかに楽しいせいかつあそび遊具を各種取揃えております。遊びの内容や人数に応じてお求め下さい。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館



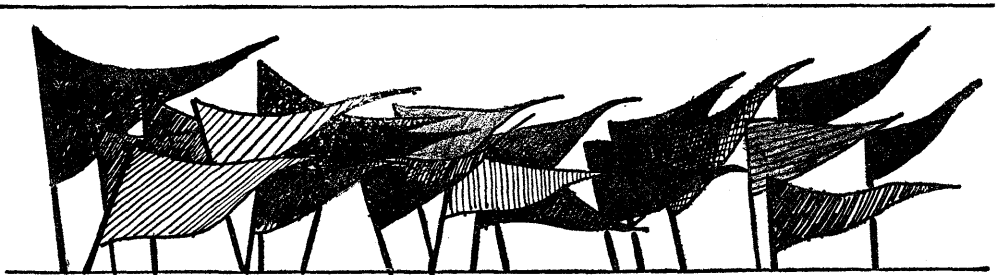
第八十卷 第五号

幼児の教育 目次

——第八十卷 五月号——

© 1981
日本幼稚園協会

時になんて美しく.....	松隈玲子.....(4)
紫の話.....	堀田吉雄.....(6)
京の色彩.....	田中澄子.....(10)
自然の色彩と子ども.....	岡本多加子.....(12)
歴史人口学からみた生と死 五.....	鬼頭 宏.....(14)
私の幼児教育論.....	山下恒男.....(23)
私の保育.....	志熊淑子.....(30)
手——周郷博先生に.....	田村さと子.....(36)



子どもとの出会いの中で学ぶこと①……………水沼昭子…(38)

「復刻幼児の教育」並びに懸賞論文募集のお知らせ……………(40)

書評……………(42)

★海外文献紹介……………(46)

ブリュッゲルの「子供の遊戯」(1)

——作品成立の背景——……………森 洋子…(48)

史料紹介

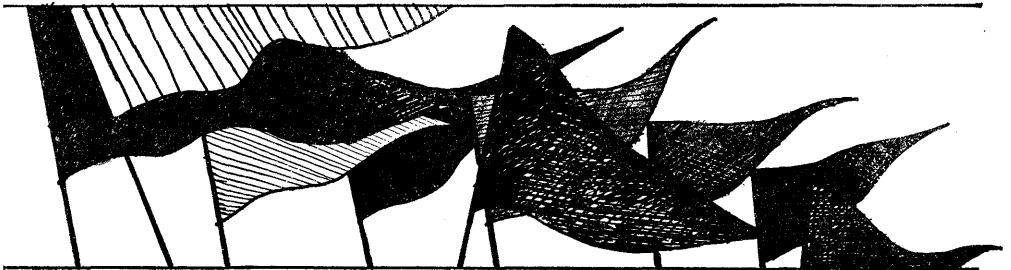
『邦訳 日葡辞書』②

——わが国中世の児童文化史研究によせて——……………(61)

表 紙・中村 宗弘

表紙題字・比田井和子

カット・福田 理恵



時になつて美しく

松隈玲子

澄み渡った空、明るい太陽、美しい樹々の若芽、どの一つにも人智でははかり知ることのできない神の恵み、いのちの躍動が感じられる五月です。

旧約聖書に「神のなされることは、皆その時になつて美しい、神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない」ということばがありますが、春の美しい自然のいぶきの中で、思い思いの遊びを展開している子どもたちの姿を見ると、一しおこの思いが実感となつてせまります。

二歳児には二歳児の五歳児には五歳児のその時々々の美しさを充分に発揮させることができているだろうか、日々折々、一人ひとりの子どもたちの美しさをしっかりととらえ、大切

に育くむ努力をしているだろうかと自問自答するとき、目立つ子どもに注意をうばわれたり、集団づくりに熱心になりすぎて、目立たない子どもを「見おとした子ども」にしてしまつたり、あるいは、「やらせればできた」という経験から、次々に、年齢以上の活動を設定して子どもたちを引っぱっていくことに躍起になっていることの多い自分に思いあたります。

幼ない心に、不安と希望を抱いて、はじめての集団生活を迎えた子どもたちも、保育者や友だち、遊具や飼育動物など、人や物との出会いとかかわりを通してだんだんと園生活になれてきたこの頃です。

しかし、全体的にみれば、園生活のリズムを受けとめ、幼稚園での生活が楽しくなってきたように見える子どもたちの

中にも、気をつけてみると、この時期に多くみられるさまざまななどまどいやおもいを持っている子どもたちのいることに気がきます。

「お兄さん組になったのだからしっかりするのよ」と家庭でも園ではげまされ、気持の上ではその気になっているものの、具体的にどうして良いかわからずおろおろしている子ども、遊んであげようと思って年少児にさそいかけ「いや」と言われてベソをかいている子ども、入園まで、家庭で絵本をよんだり積木遊びをしたり、母親とあるいは一人で静かに遊ぶことが多かったために、子どもたちの元気な声も、活気あふれる園の雰囲気も、騒音に感じられて、本来ならば、いきいきとふくらむはずの内部のイメージさえもしぼんでしまつて畏縮している子ども、一人遊びを充分楽しむ間なく集団への参加や人とのかわりを急がされるあまりに、幼稚園はつまらない所だと思っている子どもなどさまざまです。

このような子どもたちの状態も、保育者やおとなの立場から見れば、こうして相手にも意志のあること、自分の思い通りにはならないことなどを体験しながら社会性を育てていく大切なプロセスであると考えられますが、当人にしてみれば、少なくともその時には、この上もなく悲しい思いの中にいるわけです。

ですから、このような子どもたちに対して「入園前の外遊び・子ども同士の遊びをさせないから」「親の過保護」「子どもの社会性の未熟」などとその原因を親や家庭にのみ求め「親が変れば子どもが変る」という信念のみを強く押しださないようにしたいものです。

親の変革を求める前に、まず保育者自身の変革をこころみてみましょう。それは、青虫が蝶になるように、驚くような変化でなくても良いのです。ほんの少し、見方を変え、今までのよりも一歩子どもに近づいて、両親と共に重荷を負い合う保育者としての思いで、一人ひとりの子どもを園でも家庭でも大切な宝として見守るものになりたいと思います。子ども一人ひとりには、神さまからいただいた賜がたくさんあります。その賜を、その時になつて美しくゆたかに育てることが、神から、永遠を思う思いを授けられた人間としての保育者のつとめであるように思います。

(西南女学院短期大学)

紫の 話

堀 田 吉 雄



「むらさきの」語原を考えてみた。すぐ思い浮べたのは「群らがり咲きーむらさき」ではないかと思つた。『倭訓之葉』に當つてみると、やっぱりそうだ。人の考えつくことはそんなに違わないものだと感じた。

原野に群らがつて咲きにおつている紫の花があるとすると、多分りんどうか、ききょうではないかと思つた。有名な額田女王の歌。

あかねさすむらさき野ゆきしめ野ゆき
野守は見すや君が袖ふる

紫野が出てくる。この歌の情景は近江の蒲生野というが、京都にも紫野はある。そこに名刹大徳寺があり、誰しも一休和尚を想起するだろう。

一休も紫衣をまとつただらうと思う。僧侶の着る衣の色は普通すみ染めである。そ

れがしだいに出世して、最後は紫衣に到達する。江戸時代に、たしか紫衣事件というのがあった。

天皇が將軍の承諾なく、勝手に紫衣をある坊様に与えたのは怪しからぬとした事件であつた。紫雲がたなびかないことには、み仏は出現なされぬであらう。

私なども、もうそろそろ紫雲たなびいて、お迎えがくる頃かなあと、心の底では感じているのである。しかし、この世で悪いことばかりしているから、とても紫雲には縁なく、火の車の迎えがくるのかもしれない。

ともあれ、紫という色は、高貴の色とされたことは、昔も今も変わらないようである。だが、今は自由世界の有り難さで、庶民がいくら紫の色を日常生活に取り入れても、誰も文句をいう人がない。

昔はそうではなかった。だから、禁色きんじきといわれている。僧衣では紫は禁色であつた

のであろう。天皇の尊貴を以てしても、將軍のコンセンサスなしには紫衣を下賜することが出来なかった。

もっとずっと大昔に、聖徳太子が冠位十二階の制というものをお定めになったと、国史の教科書にも書いてある。その冠位の最高の色がやはり紫であったという。

降って令制が布かれても、濃紫は、一位にあたる色であったという。中国では、天子の座は紫微宮にあるものとされた。やはり紫がつきまよっていつている。

現在でも、沖繩では家を新築すると、必ず「紫微鸞駕」という四文字を板切れに墨書し、棟木の所にうちつけるのが、民俗になつてゐる。どういふ意味かと聞いても、答えてはくれないが、ただ、そういう仕来りになつてゐるとは話してくれる。おめたい文句には違ひないらしい。

どうやら、紫を尊ぶ思想は、中国伝来のものらしい。あるいはインドが元であるか

もしれない。

インド—中国—韓国—日本というようなコースになつてゐるのかもしれない。それなら西欧はどうかという、これが亦紫を禁色としてゐるのである。

ギリシャ・ローマ以前にエーゲ海文化といふのがあつた。実は、このエーゲ海が、古代紫の発祥地であつた。私は、そんなこと知らなかつたのだが、昨夏NHK名古屋スタディオで、小沢吉見氏（名古屋保健衛生大学教授）と対談したことがあつた。

ラジオ番組で「膝を交えて—海女の紫・王様の紫」という題目であつた。私は、自分の研究上、海女の紫のことを知つてゐたのだが、王様の紫については余り詳しくはなかつた。

私は、若い頃西洋史を専攻した一時期があり、紀元前フェニキアという国がエーゲ海に面して存在してゐたことはよく知つてゐた。フェニキアは都市国家で、チルスと

いふのがあつたことも当然承知してゐた。

フェニキアは地中海貿易を手広くやつてゐて、チルスがその一中心港であり、チリアンパープルといつて一種の貝の肉から紫の色素を採つてゐたことも、若干は聞き知つていたのであつた。

しかし、詳細については、小沢氏と対談して教えられた。チリアンパープルは即ちチルスの紫で、それがいわゆる貝紫といふ動物色素であつた。

古代人が使用した染色は、その九九パーセントが草木染めであつた。紫でも同じこととて、現に日本にはムラサキといふ草があり、特に武蔵野に多く野生してゐたといふ。

紫草ともいふが、普通は単にムラサキで通つてゐた。これは、根の方に色素があつた。ところが、染色研究家の間では、早くから貝紫といふ動物色素のあることを問題にしてゐたのである。

それは、不思議にも私の郷土ともいうべき志摩の海女らが、日常何の気もなしに用いていたのである。前者即ちチリアンパールはホネ貝という長さ十五センチぐらいの魚の骨に似た多くのトゲを持つ貝で、フエニキア（現トルコ）の河海に生息している。

後者は、志摩の海にいくらでも見つけれられるイボニシと称する小さな長さ三―四センチの巻貝である。このイボニシの貝肉をそつと貝を廻転さすようにしてお尻の方まで、すつぽり取り出す。尻の先端の少しくうす緑色を帯びて灰色かかった部分に、紫色の色素がかくされているのであった。

この他、北米・南米などに、貝肉の一部に紫の色素を含むものは、いくらもあるらしいことがわかってきた。単に、ホネガイやイボニシだけの専有ではなかったのである。

私の比較的よく知っているイボニシにつ

いていうと、妻楊子の先などにこの貝の尻肉をつけて、シャツや手拭など、海女の着用するものの一部に模様をつけるのである。

海女には、そういう習慣が古くからあったのである。今では、イボニシを取ってめんどろなことをする海女は少なくなつたが、老海女の間では、今もイボニシによる貝紫を用いてセーマンとか、ドーマンとかいう呪いの秘法を使っている。

セーマンという呪符（まじないの印し）は縦と横と線を九本組み合せたもので、ドーマンは星型である。こういう呪符を貝紫で頭部の鉢巻やイソナカネ（白布の腰巻）に描くわけである。今は簡単に多く墨書する。

海中で作業する時、これらの呪符がついていると海の魔物が寄りつかないといわれているのである。呪符を描く時は、妻楊子などの先で模様をかき、太陽光線にさらす

と、美しい紫色に発色して、潮水にいくらもまれても色あせることはない。

志摩の海女らが用いる紫は、彼女らの日常の姿であるが、チリアンパールの方は、反対に高貴な人々の専用であった。つまり禁色であった。

ルネッサンスの中世の壁画など見ても、聖母マリヤの服の色は、紫を用いることが多かった。「紫の服をまとつた」人とは、皇帝とか、法王など、最高の人々を意味した。

このように、並べてみると、紫という色が、洋の東西を問わず、最高の色になつていることがよくわかる。これは何故だろうか。私にもよくわからないが、多分この色が静寂の感を見る人に与えるからではないだろうか。

赤色は、太陽の色、動く色と思われる。この赤色に灰色を加えると紫が加つてくる。万葉の昔、

むらさきは灰さすものぞ椿市の
八十のちまたに逢へる児やたれ

こんな優しい歌が、大神神社おほがみの付近で歌
われていたのであった。その他、紫に縁の
ある万葉の歌は多いのである。

紫のあが下紐の色にいでず
恋かも瘦せむ逢ふよしをなみ

これも、絵のような恋の情景と思われ
て、まことに優美である。女性の下紐の
色にしばしば紫は用いられたことが伺え
る。

あかねさす——と歌って額田女王の秀歌
に対して、大海人皇子の返された歌は、こ
れ又すばらしかった。この返歌の中にも、
紫の色はほんのりとおうているのであつ

た。

むらさきのにはへる妹をにくくあらば
人妻ゆゑにわが恋ひめやも

額田女王は、紫のにはふような美女であ
つたと思われる。また、日本独自の総合芸
術といわれる茶道では、紫色のふくさが用
いられていることは、誰も知っていること
である。紫にも、いろいろニューアンスが
あつて、千変万化は見せるものの、終始落
ちついて静けさの中にある紫は、上品とい
うよりいいようがあるまい。

歌舞伎でも、紫はよく用いられている。
揚巻・助六で知られる一場面、助六の額を
飾る長い綱が紫であつた。沖繩舞踊でもこ
の長い鉢巻がよく使われる。

先日、宮中の御歌会始の様子をテレビ
で拝見して、なるほどと思つたことが
一つあつた。天皇のご座席の背景のまん幕

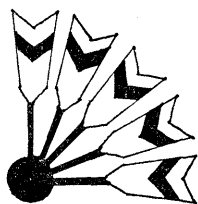
が、美しいうす紫であつた。

その他、むらさきという呼び名、台所で
主婦が日常使う醬油、これを女房言葉でい
うとむらさきであつたし、いやしい魚とさ
れるが美味のいわしも、むらさきといわれ
た。

やはり女房言葉であつた。最後に日本の
王朝文学の代表的な作品が源氏物語である
ことは申すまでもないが、その作者が紫式
部であつたことを忘れてはならないであろ
う。

(一九八一・一・二六)
〔伊勢民俗学会主宰〕

京の色彩



田中澄子

人に持ち味があるように、色にも自分があると思う。この場合の色とは、単なる好みではなく、生いたち、あるいは生活の中で育まれた人柄といえるものなのかもしれない。

一口に、自分の色というものの、一朝一夕に出来るものではなく、虚のない正味であらわれるだけに、まことに始末に困る。

色が人柄を象徴するように、言葉もその類に属すると思うが、言葉は本人が黙していればまだしも救いがある。しかし色の方は、裸で暮すわけにもいかないので、毎日が晴れがましいことこの上ない。

私などは、積年行きついた色に苦しめられもがいているが、三歳児でも、既に自分の色を持っているのには驚いた。

それというのも、私共の園に來ている子どもの大半が、京友禅と関係の深い家業の中で育っているからかもしれない。下絵やデザインを描く——これをもとに型紙を彫

る——糊に色を加えて元絵を活かす色合わせ——染め上げて着物に仕上げる——等等、複雑な工程から着物はうまれる。このような家内工業の仕事場が子どもの遊び場であり、道具が玩具であるから、子どもたちは、染色の感性をしらずしらずの中に会得し、色の感性をみがいているのだ。教育はこんなところで、もうはじまっているといえよう。

画壇の大御所、梅原龍三郎、安井曾太郎、両画伯の生家が、京染問屋であったと聞いたことがある。近年では、加山又造画伯の生家もまた、友禅の下絵を描いておられたとのこと、三つ子の魂百までの典型であるう。

いろいろな衣類の中でも、和服はとりわけ不思議な魅力を持つ。あの狭い布幅に、複雑な模様と多彩な色が、競いあうでもなく、互いの色の個性を生かしあって、調和を保っているのは、着物の特性といえよ

う。一つ間違えば使用にたえない危険と背
中あわせの彩色の緊張が、かえって和服な
らではの美を放つのではなからうか。伝統
の中で磨きあげた、日本人の感性の極みと
でもいえよう。

京染業の経営者がこんなことをいった。
染の中で一番重要なのは、絵の見合わせ
で、その専門の職人は、経営者よりも高給
で遇するとの事。色の匙加減如何が多く
生活にかかわるとあれば、もっともなこと
だと納得がいく。職人が色をうみ出す一瞬
は、理屈ぬきの神技的な感性が作動するに
ちがいない。

こういった地域の特性がある故に、幼稚
園での絵画指導は、むずかしく、かつ、手
ごたえがある。保育者の好みの色を、一定
の濃さに溶き、それに筆をつきさして、さ
あ描きましようという訳にはいかない。子
ども自身が好きな色をうみ出すのに手をか
し、好みの濃さをつくり出すのを助けるの

が保育者の役割と心得る。描きたいと子ど
もが願うものや事柄を、より自然に表わせ
ると思つて、画用紙の色や大きさを選んだ
つもりが、子どもたちの好みにあわず、用
意し直さなければならぬこともある。

毎日が、新しい発見であり、驚きであ
り、喜びである。

毎年秋、私どもの園では、絵画製作展を
公開している。おこし下さる方は、色の豊
かさ、美しい色彩、個性味、調和美など、
作品の楽しさを御指摘下さるが、社交的辞
令半分とみても、全く空々しい評価とは思
えない。これも元を正せば、園の指導とい
うよりも、園児の家庭環境に負うところが
大きいと、常々思っている。

「環境」——そうだ。色は、環境をう
み、育て、そして環境の中でうまれかわっ
ていくものなのだ。

先年、中華人民共和国を訪れたが、初冬
二週間の大陸の印象は、白茶けた土、紺色

の人民服、風になびく赤い旗、これだけ
で、実に寒々したものだ。それにひき
かえ日本では色があふれている。氾濫し
ぎているともいえるが、色の乏しい国より
も、色の豊かな国の方が、活気があつて
いと思つた。

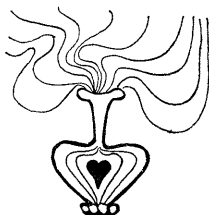
多色な友禅染を着こなす日本人である。
やがては豊かな調和のある、日本の色を、
磨きあげていくに違いない。そして、新し
い色を包む美しい環境を、育てるにちが
ない。
(京都・光明幼稚園)

*

*

*

自然の色彩と子ども



岡本多加子

私たちの幼い日の記憶の中には、美しい自然にかこまれて遊んだ郷愁があります。

澄んだ青い空、緑、黄、茶、灰色など、さまざまな色が織りなした裏山、土の道、そこでみつけた真赤な木の実、こうした中を駆けまわって終日時を忘れて過しました。

現代、ビルの一室で仕事をし、喧噪とした街の中で生活している大人達は、休日には自然を求めて出かけます。広々とした草原や、紅葉した樹々に心がなごむことでしょう。大人にとって自然界はやすらぎです。しかし、子どもはどうでしょう。子どもにとって、自然界は決してやすらぎではなく、創造の源です。名もない雑草や雑木林からも感動が生まれ、新しい世界の発見があります。最近の子どもは、絵本の中でしか自然の美しさを知ることが少ないことは本当に残念なことです。

私の園の周囲は、まだまだ自然が残っている地方です。門の前に樹齢百年に近い大

きいちょうの木があり、秋にはみごとな黄色い葉が私達の眼を楽ませてくれます。やがて、そのいちょうの葉は砂場いっぱいに敷きつめられ、「お砂場は黄色になっちゃった」と、子ども達は拾っても拾っても手にいっぱい黄色い葉を集めます。

春、新しい芽が吹く頃、「先生、いちょうの葉っぱはうすみどり色だね」昔、私達は萌黄色と言いました。草木が萌える、木の芽が生まれる、さまざまな躍動が感じられます。その萌黄色のいちょうの木の下の、入園もない子ども達がにぎやかにかける姿はまさに躍動です。

松葉でうすも色のさくらの花びらを刺している年長児が、小さい組の子どもに、「どうぞ」とプレセント、恥ずかしそうに「ありがとう」という年少児、可愛い出会いです。いつの間にか、園庭の隅ではままごが始まっています。器に盛った砂に、野のすみれと緑の小さい葉がきれいな

コントラストを描いています。

「先生、見て、まぜごはんみたいでしょ」「まあ、おもしろね、いただきます」

子ども達は得意になって、まぜごはんつくりに夢中です。砂に盛られる草花は、摘んできた野の花でつぎつぎ色どられていきま

す。
幼稚園から散歩に行く大きな公園、そこでは、一年中美しい自然が展開され、みんなこの公園を友達のように愛しています。

みどりの公園

大きな庭でびっくり

みどり色ばかりでびっくり

ころころ何遍も

ころがったけれどみどり色

草のにおいが、ぼくの体にくっついた

いいにおいだった

葉っぱの中の虫が

「苦しい」って、言ったみたい

ちようちよが心配そうにのぞききた

走っても、走っても

まだまだみどり色だった

これは、入園まもない三歳児が初めて公園に行きつぶやいたことばから、私が詩にしたものです。芝生の上に靴を脱いで坐ると、「わあ、つるつるしている、いい気持ち」と、大さわぎ、草の間を縫って、しろ

つめ草を探したり、クローバーやたんぽぽを摘みます。草すもうをしたり、花かんざしをつくって遊びます。

子ども達は、大人よりずっと早く自然の変化に気づきます。園庭のもみじが紅葉した頃、赤いもみじに茶や、黄色がまじっている葉を拾って、「このもみじは、おしゃれさんね」と情緒ゆたかな表現をします。

ベンチの上に、そうした赤や黄、茶色の葉を並べて自然のうちに美的感覚や調和、配色のすばらしさを感じとっていきます。大

きなやつでの葉の奥で、赤やだいたい色の実がいっぱいついているのをいち早く見つけるのも、カサカサした土の中から、小さい緑の芽を探し出すのも子どもです。緑の葉にくっついていてる青虫を見て、「おんなじ色にくっついていておかしいね」と不思議がります。

自然の中の色彩は本当に美しい色です。人間がつくりだす色には限りがありますが、自然の色彩には変化があり、無限の色がつくりだされます。

私は、こんなにすばらしい自然と子ども達のかかわりを残しておきたいいつも思います。でも、どんなに高価な絵具でも画くことは不可能な気がします。それはあまりにも自然の色と子ども達とはびつたりすぎているからです。

(愛知・豊川幼稚園)

歴史人口学からみた生と死 五

鬼頭 宏

五、出産と子の成育

(一)

毎年五月五日が近づく、新聞に子どもの人口が発表される。

過去三十年間、総人口に占める年少人口（一五歳未満）の割合は減少しつづけているが、今年はどうなるだろうか。

昨年は人口動態統計の上で特筆すべき年だった。人口千人に対

する出生数が一三・七（推定）と、四十一年の水準にならぶ低出生率を記録したのである。四十一年は丙午（ひのえうま）歳にあたり、女兒の出生日を偽って登録することもあったと考えられるので、

昨年は、明治三十三年に人口動態統計が始まって以来の最低記録になったと言える。最近の出生率低下傾向の原因として、終戦直後のベビー・ブーム期に生まれた女性が、出産適齢期を過ぎつつあり、適齢層の女子人口が減少していることもあるが、子どもを産みながらない夫婦が増加していることが重要である。女性の社会的進出や子ども中心から夫婦中心の生活を望むという価値観の変化、

表1 出生児数別にみた夫婦組数の分布(信濃・湯舟沢村)

分類	出生児数(人)										平均
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	出生数
完結家族	1	3	7	6	13	19	11	7	2	2	4.66
非完結家族	24	25	12	11	8	7	2	1	0	0	1.87
合計	25	28	19	17	21	26	13	8	2	2	3.10

大都市でとくに著しい住宅事情の悪化、高学歴化に伴なう教育費の増大などが出生児数を少なくしているのである。

五十二年に実施された第七次出生力調査(厚生省)によると、新婚も含めた全夫婦の平均出生児数は一・八九人、結婚二〇年以上の夫婦については二・三九人だった。将来の完結出生数は二・二人程度と推定されている。

このように現在では二人程度の出生がふつうになっているのだが、江戸時代の夫婦は何人くらい産み、どのように育てていたのだろうか。今回は信濃国湯舟沢村(現・岐阜県中津川市)の例を中心に、家族復元法を利用して宗門改

帳に登場する夫婦の追跡調査を行なった結果を紹介することにしよう(鬼頭・一九七四)(鬼頭・一九八二)。

(二)

表1は湯舟沢村における一夫婦あたり出生数の分布である。観察対象になったのは一七三一―一六五年に結婚した夫婦のうち、妻が三〇歳までに結婚したケースである。これを妻が四五歳まで婚姻が持続した完結家族と、四五歳以前に婚姻が解消した非完結家族とに分けて示した。

全体の平均出生数三・一人は、意外に少ないという印象を与える。表からわかるように再生産年齢の上限に達しない非完結家族が多いこと(五六%)が第一の原因である。

江戸時代の婚姻が短命だったことはすでに見たとおりだが、このことはある家にとって子どもが少なかったことを必ずしも意味しない。若い年齢では再婚する男女の比率も高かったからである。完結家族についてみると平均出生数四・七人、ピークは五人であった。

しかしこの数のほかに隠れた出産があって、実際の出生回数ももっと多かったと考えられる。というのは宗門改帳の資料的制約から、乳児死亡の大部分が把握されていないからである。したが

表2 有配偶年数(妻16~50歳)および妻の結婚年齢と出生数の関係

(信濃・湯沢村)

(1) 有配偶年数

(2) 結婚年齢

有配偶年数	夫婦	出生数	平均出生数	結婚年齢	夫婦	出生数	平均出生数
0~5	36	13	0.36	11~15	14	30	2.14
				16~20	74	260	3.51
5~10	23	43	1.87	21~25	49	163	3.33
				26~30	24	46	1.92
10~15	11	35	3.18	(3) 相関係数(N=161)			
15~20	16	61	3.81				
20~25	18	60	3.33	単純相関		偏相関	
				有配偶年数	0.781	0.784	
25~30	23	104	4.52	結婚年齢	-0.159	-0.184	
30~35	34	183	5.38				

ってここである。「出生」数とは厳密には数え年二歳児の数であることに留意していただきたい。

さて表1をみると出生数の分布は相当幅広い(標準偏差二・三〇)のだが、何が出生数を決めているのだろう。結婚から出生にいたる過程を追って出生児数の決定要因について考えてみよう。

まず結婚年齢、とくに妻のそれと、次いで妻の再生産年齢(一般に一六~五〇歳)における有配偶期間が重要である。第三に夫婦の生殖にかかわる能力や性的交渉の頻度、第四に流産・死産の確率、第五に出生抑制(受胎調節・墮胎・嬰兒殺し)の強度、第六に授乳・離乳の習慣、そして最後に宗門改帳の場合には、出生児が史料に登録されるまでの期間に起きる乳児死亡も問題である。はじめに結婚年齢と有配偶期間との関係を取りあげ、第三点以下については直接知ることができないので、出生率と出生間隔の面から検討を加えることにしよう。

妻の結婚年齢が若く、有配偶年数が長ければ出生数が多くなることは容易に想像できる。表2がそれを物語っているだろう。

しかし出生数に及ぼす影響は二つの要因の間で差がある。再生産年齢(一六~五〇歳)における有配偶年数の方が出生数を決定するうえで大きい力を持っていることが、相関係数に現われている(有配偶年数の方が係数自体、大きいうえに高い有意水準にある)

る)。

妻の結婚年齢の影響力が弱いのは、若年齢で結婚しても長続きするとは限らないからである。その証拠に、結婚年齢と有配偶年数の間には有意な相関関係は全く認められなかった(相関係数はマイナス0・0五七)。

それとともに、結婚が遅い場合には、おくれた年数をカバーするかのようになり、結婚初期の出産率(一年あたり出生数)が高まる傾向にあることも、結婚年齢と出生数の関連を弱めるもうひとつの理由である。

完結家族だけをみれば、当然、結婚年齢と出生数の関連は強くなるが、この場合、結婚が一年遅れると0・二四人、したがって四年で一人ずつ出生数が減る関係が成立している(出生数 \parallel 九・五四一〇・二三五 \times 結婚年齢)。

出生数と経済階層の間に負の相関関係があることを表わすことばとして、あまり響きはよくないが「貧乏人の子沢山」というのがある。いかにもありそうなことなのだが、実は、江戸時代にはその反対の現象が一般的だった。農村では、土地を多く保有する家族ほど、完結家族の出生数は多いという傾向が認められている。

例えば武蔵国甲山村(鬼頭一九七八)では保有石高五石を境にして、上層(地主・自作農)四・三人、下層(小作農)三・六人

だったし、濃尾地方農村(六ヶ村)(速水一九八〇)では、石高一〇石以上の五・九人に対して、一〇石未満層は三・八人と二人も差があった。

出生数における階層差を生んだ原因に、出稼経験率の違いなどによってもたらされる結婚年齢の早い遅い(上層では早く、下層では遅くなる傾向)があることは否定できない。しかし、もっと大きな働きをしているのは、婚内出産率の高低だった。婚内出産率は、有配偶期間中、妻が一年間に子を出産する確率で、上層農民の妻ほど出産力が大きかったのである。

(三)

年齢階級別出生率は、年齢階級ごとに、出生数をのべ年数(人数 \times 有配偶年数)で除すことによって得られる。通常、二〇代前半に最も高い出産率が現われ、それ以後はなだらかに低下する形をとる。基本的には、出産率は女子の生物的妊娠能力を示す指標であるといえるが、それを基礎として、さきに指摘したさまざまな、生態学的、社会・経済的、文化的な要因からの影響をも反映し、非常に包括的な性格をもっている。

表3に、代表的な四地域の年齢階級別出生率を示している。このうち秩父大宮郷は江戸時代の中でも低い方の代表例であり、神

表 3 妻の年齢階級別出産率

地 域	妻 の 年 齢 階 級							期 待
	16~20	21~25	26~30	31~35	36~40	41~45	46~50	出生数
秩父・大宮郷 (1764~1848)	0.203	0.221	0.163	0.127	0.085	0.027	0.015	4.21
信濃・横内村 (1671~1871)	0.165	0.219	0.206	0.170	0.121	0.072	0.016	4.85
信濃・湯舟沢村 (1731~65)	0.194	0.233	0.240	0.211	0.162	0.093	0.022	5.78
尾張・神戸新田 (1776~1871)	0.386	0.379	0.270	0.227	0.188	0.099	0.009	7.79

(1)史料：(速水, 1967), (速水, 1973)および筆者の新たな調査による。

(2)期間：湯舟沢村は結婚年代、他は各期間中の出生について観察されている。

戸新田は高い方に属す(ただし神戸新田の一六・二五歳では過大評価されている可能性がある)。各年齢階級の出生率を合計し、それを五倍すると、一六歳から五〇歳まで結婚が持続した場合の期待出生数が得られる。これを比較すると、秩父大宮郷では四・二人であるのに対し、神戸新田では七・八人となり、大きな違いが生じることがわかるだろう。

出生数の階層間格差の原因となった出生率の違い、およびその地域差の背景は何だろうか。栄養摂取の水準や居住環境の違い、およびそれに由来する流・死産水準の違いなど、さまざまな要因が「自然」出生率を決定しているうえに、これに加えて意図的な出生抑制の果たした役割も大きかったと考えられる。

それぞれの要因がどの程度、決定的な影響を与えていたのかを知ることはできないけれど、いずれも、上層農民あるいは新田村で出生率が高く、下層農民あるいは都市で低いという事実と矛盾しないだろう。

四

最近の日本女性は第一子を二六・三歳、第二子を二八・六歳で産んでいる。結婚後の短かい期間に小数の子を産むのが平均的である。これに対し、現在よりもはるかに多くの子を長期間にわた

って産み続けるというのが、江戸時代の姿だった。

湯舟沢村の夫婦（完結家族）は、夫二八・四、妻二〇・八で結婚して、二年で産み始める場合がもっとも多い（平均三・一年）。最頻出生数の五人目の子を平均一八・〇年後、そして第七子を二二・四年後に産んで、大半（九四〇％）の夫婦は子を産み終えていた。最終児を産んだ時の妻の年齢は二五から四八歳まで広い分布を見せているが、四二歳にもっとも多くが集中し（一七％）、平均三九・三歳だった。

このように、結婚してから二〇年前後にわたって出産可能年齢のほとんどを出産に追われる江戸時代の女性にとって、その負担はたいへん大きかったことだろう。またそれだけではなく、きよだいの数の多さ、長子が成年に達する頃に末子が生まれるという年齢開差の大きいことなども、家族関係や子の人格形成の面において現代との違いをもたらしたことがある。

子の産み方を出生間隔の面からみてみよう（表4）。出生数との関連で妻の出生開始年齢と最終出

表4 完結家族の出生数別・出生順位別出生間隔（信濃・湯舟沢村）

出生数(組)	出生順位									出生年齢		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	第1子	最終子	
1 (3)	9.0										32.7	32.7
2 (7)	3.1	6.7									27.6	34.3
3 (6)	3.0	4.3	5.2								26.8	36.3
4 (13)	3.8	4.2	4.9	5.6							23.2	38.1
5 (19)	2.8	4.6	3.7	4.8	5.2						22.2	40.5
6 (11)	1.9	3.2	3.0	3.3	4.4	3.7					23.1	40.9
7 (7)	2.1	3.1	4.0	2.7	2.3	3.9	4.0				22.4	43.0
8 (2)	2.5	3.5	3.5	2.0	6.5	2.5	3.5	4.0			21.5	47.0
9 (2)	3.0	2.5	3.0	2.0	2.0	2.5	4.5	1.5	7.0		19.0	44.0
全体(70)	3.1	3.8	4.0	4.2	4.6	3.5	4.0	2.8	7.0		23.8	39.3

生年齢をみると、出生数が多いほど産み始め年齢は若く、産み終える年齢は遅くなっている。

出生数別、出生順位別に出生間隔をみると、結婚から第一子出生までの期間は短かく(三・一年)、最終出生児の出生間隔はそれより二年も長い(五・一年)。しかしこのことから、出生順がおそくなるにしたがって出生間隔が開いていくというのは、妥当ではない。中間順位の出生間隔にはそのような関係を明瞭にみる事ができないからである。したがって年齢とともに出生率が低下していたのは、出産間隔が出生順位とともに拡がっていくからではなく、妻の年齢の高齢化とともに出産を切り上げる夫婦が多くなるからだろう。最終出生間隔が長いことは、個々の夫婦にとって望ましい出生数に達したときに、その段階で産み控えが行なわれたと考えられないだろうか。

結婚から第一子出生までの期間が短かいのは、相対的に妻の出生年齢が低く、したがって出生率が高いこと、子の出生を強く期待していたであろうことが考えられるが、宗門改帳の結婚記録が正確でなかったかも知れないということも見逃せない。

出生があつて初めて結婚が登録されることは、江戸時代の農民の婚姻慣行として考えられることである。例えば神戸新田では出生間隔が〇年、つまり結婚と同年に第一子の出生があつたケース

が四分の一を越えていて、平均出生間隔(結婚→第一子出生)は一・三年しかない。結婚の登録が遅れがちだったことを強く推測させるものである。

表4からは、出生数が少ないほど出生間隔が長く、反対に多産な夫婦でそれは短かいという傾向も明らかになる。少産の妻の産力そのものが小さかつたためか(栄養、体質、環境など)、産み控えあるいは出生抑制が意図的に行なわれていたのかいづれかだろう。

ところで第一子の誕生まで三年、それ以後の出生間隔が四年とというのは、経験的にみて少し間があきすぎているような気がする。出産(生)間隔は、(一)出産後の無月経期間、(二)流産によって失なわれる期間、(三)妊娠から出産までの期間によって構成される。宗門改帳によってとらえられる出生間隔には、さらに(四)乳児死亡によって失なわれる期間も加えられなければならない。したがって実際の出産期間よりも、宗門改帳の出生間隔はかなり長くなっているはずである。

妊娠から出産までの期間(最終月経から四〇週)に大きなばらつきはないだろう。それについて出産後の不妊期間は、おもに授乳との関係が大きくかわる。授乳期間が長びけば妊娠する期間は遅く、離乳が早ければ次の子の妊娠も早まる。鈴木継美(一九

八〇)が紹介しているアフリカのルワンダの例では、授乳婦の半数が妊娠するのは出産から一八ヶ月以後であるが、非授乳婦では五ヶ月以内に半数が妊娠している。

アソリのジュネーブ(スイス)市民に於ける歴史人口学的研究(Henri, 1956)は、一七世紀前半に、妻の出産率が急激に高まり、平均出生間隔も短縮したことを明らかにしている。この現象を、この期間に乳母によって子どもを育てる習慣が一般化したことと関連させて説明している。

(一)、(四)にあげた流産、死産および乳児死亡がどれほど出生間隔を長びかせていたかを、宗門改帳からつかむことはできない。しかし幸いなことに、特定地域で実施された妊産婦調査である懐妊書上帳が、それを教えてくれる。

懐妊書上帳を利用した筆者の調査(鬼頭・一九七六)から、一九世紀初頭における陸奥国白川郡(現・福島県)の一農村の例を紹介しよう。懐妊書上帳には妊娠した女子が登録されて、その後経過(流産、死産、出生、乳児死亡)が書き込まれている。母親の名前を手掛りに家族を復元して出産間隔を計算すると二・四四年だった。

出産間隔は前順位の子の状況によって拮がったり縮小する。前の子が生存している場合には二・七〇年と長く、死産および乳児

死亡のあとでは一・七六年と短い。その差は約一年あり、授乳の有無が大きく影響していたのだろう。

これをもとに、乳児死亡や死産があっても記録されない場合の出生間隔は見かけ上、四・六六年(二・七〇+一・七六)と計算できる。かりに乳児死亡が出生の二〇%あるとすると、全体の出生間隔は三・一年、それが三〇%なら三・三年となることが推定される。

この長さは湯舟沢村の例に近く、宗門改帳から得られた出生率や出生間隔が、乳児死亡率によって大きな影響を受けていることがわかるだろう。また江戸時代の夫婦が見かけ以上に多産であったことも理解できる。次回は、乳幼児死亡を中心に、生まれた子がどのように生存し、成育していったのかを見ることにしよう。(上智大学)

〔参考文献〕

速水融 一九六七 「徳川後期尾張一農村の人口統計統篇——Family Reconstitution 法の適用——」『三田学会雑誌』六〇巻一〇号。

速水融 一九七三 『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社。

速水融 一九八〇 「近世濃尾地方農民の人口学的觀察——四六〇〇組の家族復元を通じて——」 徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十四年度。

Henri, Louis 1956 *Anciennes Familles genevoises*, I, N.E.D.

鬼頭宏 一九七四 「木曾湯舟沢村人口統計——一六七五—一七九六年——」 『三田学会雑誌』六七卷五号。

鬼頭宏 一九七六 「徳川時代農村の乳児死亡——懷妊書上帳の統計的研究——」 『三田学会雑誌』六九卷八号。

鬼頭宏 一九七八 「徳川時代農村の人口再生産構造——武蔵国甲山村、一七七七—一八七一——」 『三田学会雑誌』七一卷四号。

鬼頭宏 一九八一 「近世農村における家族形態の周期的変化」 『上智経済論集』二七卷二・三号。

鈴木継美 一九八〇 『人類生態学の方法』東京大学出版会。



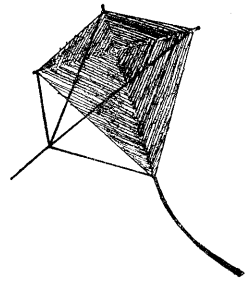
私の幼児教育論

— 送り手と受け手の間 —

(1)

発達論に関する研究会で「書物の社会学」のようなことが話題になったことがある。つまり、本の読まれ方の社会学（あるいは心理学でもよいのだが）ということで、その本に何が書かれているかだけでなく、どう読まれ、どう伝わるかが問題となったのである。

例えば、ある人が早教育の弊害を説いて、いくつかの具体的な英才塾を槍玉にあげたとする。ところが、何人かの読者から自分



山下恒男

の子どもをそこにかよわせたいので場所を教えてくださいと問い合わせてくる場合がある。このような場合、著者の意図がそのまま伝わらないとするならば、そうさせる社会的背景、あるいは読み手の側の事情というものを考えざるをえない。

ところで、以前私は、ある育児雑誌の編集者にむかって、「しつけの本というのは、読者の神経を逆なでするような、異和感を与えるものでなくてはならないと思います」と語って、彼女のひんしゆくを買った。読者の方にあらかじめある基準が存在している、それに合致するものは読まれるが、合わないものは無視される、したがって、書き手が何かを伝えたい時には無視されない接

点が必要なのではないか、ということとその時私は言いたかったような気がする。

そういう意味では、「幼児教育論」といった標題を持つ文章は、特にそれが「しつけ論」的な内容のものであれば、はじめからいくつかの困難をかかえていることになる。「育児」あるいは「子育て」というものは人類が永年続けてきたので、多くの人がそれぞれの体験を持ち、「専門家」は無教にいと考えてよい。彼らはみんな自分の「論」を持つているはずである。

にもかかわらず、特定の「論」が伝えられ、そして読者がそれに耳を傾けるとしたなら、それを可能にしているのは何なのだろうか？

一つには、それが「専門家」の権威というものかもしれない。読者はとりあえずはそれを読む。しかし、それがどれだけ読者に影響を与え、受け容れられているかということになると疑問もある。

そしてもちろん、「情報」の流し手は専門家に限られるわけではなく、文章化されていないものを含めるとそれは膨大なものとなるだろう。

社会心理学では「普及過程」といった研究領域があつて、ある地域で新しい作物の栽培を始めたりした場合、それがどのような

経路で普及してゆくかを調べたりしている。それと同様に、様々な「育児情報」の流れというものを明かにすることができるなら、それは「論」そのものの内容にもつと影響を与えることになるに違いないし、現在の育児のかかえている問題点も浮き彫りにされると思うのである。

(2)

専門家による「論」を考える場合、よく問題になるのは、「すぐれた研究者かならずしもすぐれた教師ではない」ということで、「理論」と「現実」の乖離が指摘されたりする。たしかに、私などの限られた見聞でも、児童心理学や青年心理学の大家と言われる人が、自分の息子に手こずっていたり、という類いの話はすぐに思い出すことができる。

けれど、このような考え方を押し進めてゆくなら、子どものいない人間は子どもについて論じる資格はない。ということになつてしまふだろう。

もちろん、両者で無関係であつていいということではないし、そもそもそんなことはあり得ないだろう。にもかかわらず、結果として生み出されてくる「論」は、一方に、論者の日常の此事、

自分の子どものエピソードなど中心にしたものがあるかと思えば、一方では、生活のにおいのまったく感じられない、ひどく冷静で第三者的なものもある。

これはおそらく、どちらがすぐれている、といった判断の対象になるものでなく、たんなる好みの問題でもないだろう。つまり「論」の内実、すぐれて思想的な問題と深いかかわりを持つものである。

心理学者のビネーやピアジェが、自分たちの子どもの観察をもとに理論構成したのは知られている。ビネーは『新しい児童観』の中で、マルグリトとアルマンドの二人の娘について言及している。浜田寿美男氏はピアジェについて、次のように書いている（『発達段階論で何が見えてくるか』、『発達』、第一巻二号一九八〇）。

「たとえば、ピアジェの『知能の誕生』という本を読んでみる。最初は、難解な理論と精緻な観察に、文字どおり度肝をぬかれる。しかし、よくよく読んでいくとまったく奇妙な感じがしてくる。この本は、ピアジェが自分の3人の子どもの観察をもとに、0-2歳までの精神発達を論じたものである。しかし、彼は、自分の子どもをまるごと観察したのだろうか。よく言えば、子どもを客観的に見ている。しかし、自分の子どもをこれほど突きは

なして冷淡に見ることが出来るものだろうか。そうした感じを抱かせるのはなぜであろうか。おそらく同書のなかでは、父親が父親として、母親が母親として登場することがまったくないからであろう。」

浜田氏の感想を肯定しつつも、父親としてのピアジェがつねに先行しているとしたなら、あのような理論体系は完成しなかったこともまた、容易に想像できる。

余談になるが、スウィフトが「アイルランドの貧民の子供たちが両親及び国の負担となることを防ぎ、国家社会の有益なる存在たらしめるための穩健なる提案」（二七二九）の中で、アイルランドにおける貧民の窮状を訴えている。彼は、貧民の子どもを食肉として供給するという少々グロテスクな「提案」をしているのであるが、「私の方になんら個人的利害感情はない」と言いつつ、「一ペニーの儲けをはかるうにも私にはそんな子供がいない。一番末は九歳だし、愚妻はもう子供をつくれる齢ではない」（山本和平訳）と、たとえ冗談にせよ、あの皮肉屋で厭人癖のあると言われる彼が、自分の側の事情に言及しているのも、何かほほえましい。もっとも、一生独身生活を続けたと言われるスウィフトにはたして本当に子どもがいたのかどうか私は知らないが。

それにしても、私たちが「子ども」を考える時、そこでの子どもは常にオトナ一般にとって子ども一般であるか、親にとつての自分の子どもである場合が多い。これ以外の可能性はないのだろうか？

そして、オトナの基準というのは、いつも「子どもではない私」であるのだ。けれど、例えば「いつもおなかをすかしていた私」というのはどうなのだろう。社会的には、オトナは子どもでもないし、子どもはオトナではない。しかし、たとえば今は飽食しているオトナであっても、おなかをすかしていた子ども」は私の中にあつて完全に消え去ることはない。

私たちの子どもへの思い入れのなかには、このような領域のものも浸透しているはずである。だから、一見イメージションの世界のことがらのようでいて、実は現実の世界でもあるのだ。したがつて、「私」が子どもに投射されたものが、私になつての「子ども」である場合も多い。そういう時、私の中の「専門家」や「親」は少し後退するようだ。

しかし、ともしれば、私たちはそのことを忘れて、子ども分り

パーセント、オトナ分一〇〇パーセントの存在として自分たちを規定しようとする時、必然的に私は一人の親(子どもがいない場合には一人の「おじさん」)であるか、オトナの一人にすぎなくなる。「子ども論」の総論の部分は「専門家」でもあるオトナとして、各論の部分は親としてふるまう。

このような使いわけというのは、専門家であれ、非専門家であれ、それと気づかずに行なっているものである。そういう意味ではオトナ同士はすべて共犯であり、オトナからのメッセージはいつもオトナに向けられる。

そして、オトナの中では体験が似ているもの同士が相手の言葉に自然と耳を傾けるような気がする。もちろん、ここでは思想や人生観、子ども観といったものは無視できないのだが、そこにさえ「体験」は影響を与えてしまっているのである。

だとすれば、ことさら私は「子ども観」という抽象的なものにこだわらなくなるし、自分だけ「オトナの一人」であることから逃げ出そうとしたりもする。だから、私が太宰治の「子供より親が大事と、思ひたい。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝らしく考えてみても、何、子供よりも、その親の方が弱いのだ」(「桜桃」という文章が好きだと思ふのも、私の「幼児性」のゆえだけでなく、しばしば現実にそぐわないオトナと子

もの固定した役割の逆転を願っているからでもある。

(4)

しかし、私にしても二人の男の子がおり、現実の生活は続いている。オトナでもなく子どもでもない中途半端な存在としてあり続けたい私も、容赦なく私の空間に飛び込んでくる子どもたちからいやおうなくオトナであれと迫られる。それと意識しないで接する多くの局面だけでなく、何らかの判断を迫られる場合もある。

— そのような判断をつなぎ合わせていくなら「私の幼児教育論」が見えてくるはずなのだろうが、私自身にはさっぱり言語化することは出来ない。そしてまた、する気もない。

こうすると私が困る、不快になるというものは一方にある。そういう場合は、私の個人的事情や好みを出来るだけ率直に語るようにしている。こうすると、あるいはこうしないと子どもが（近い将来）こまるのではないか、と思うこともたしかにある。それは私に對してかなりの強制力を持っている。そして、私は時に矛盾した行動をとる。しかし、依然として私は行きあたりばったりの、しつこともいえぬしつこに居直っている。それは、私が怠惰

であるということだけでなく、計画的、系統的なしつけに信頼を置いていないからであるかもしれない。

子どものイメージを一つのものとして一般化しようとする志向は、子どものしつけ、教育というものの「客観的方法」を確立しようとする要請と軌を一にしている。

しかし、このようなことの結果としてアウトップされる「論」が非常に狼狽な状況を無視した所で生産されてくることは言うまでもない。そのこと自体が悪ではないにしても、それがしばしば現実の生活を抑圧するものであることは承知しておくべきだろう。

— そして「論」の中身の検討は、それを生み出す側の事情、その伝達する経路を含めてなされねばならない。けれど、「論」や「情報」を必要とする人間の方に切実さがあるのはいうまでもない。

そうしたことも関連する試みとして、一九八〇年秋の教育心理学会で、冒頭にふれた研究会が中心となって、自主シンポジウム「発達研究と現代社会(2)——子育てと育児書をめぐって」がもたれた。この時司会をした私は、比較的漫然と話を聞いていて、いまここでその時の様子を再現するつもりはない。

ただ、発題者の一人である雑誌『ベビーエイジ』編集部の方

洋子氏の話を紹介しておこう。彼女によれば、育児雑誌登場の社会的背景として、

①核家族化により、世代間の育児知識（経験・コツ）の伝達が断たれた ②出生率の減少により、母親に育児経験が少なくなり、一方時間の余裕ができた ③地域社会の機能低下にともない、育児情報を交換する場がない ④高度経済成長、学歴社会化の進行する中で子育ての重要性が増大した、ということがあげられるという。

そして、『ベビーエイジ』が、「私の立派な母親がわり」と書いてきた三二歳の母親の話を紹介していた。つまり、母親（おばあちゃん）の不在を埋めるものとして雑誌が期待されているのだが、それはたんなる知識ではなく、自分一人が「未熟な母親」ではないと思ひ込める同じような仲間とのつながりを求めている、現代に生きる私たちの孤独さをあらためて示しているように思える。

だから、そこで求められているのは学者の理論ではなく、似たような状況にある人々の体験記なのである。にもかかわらず、学者の論が無用のものとして斥けられる気配もない。それはどういうことなのか。

(5)

今まで幼稚園や保育園で行なわれているやゝ組織的な教育にふれてこなかった。

私は幼稚園等で行なわれている保育や教育のしくみや内容について特に知識を持っていないのだが、実際の保育や教育に、「幼児心理学」や「保育学」「児童学」等がどの程度の影響を与えているのか興味がある。

それは、私が「教育心理学」が実際の教育上どの程度影響を及ぼしているのかについて関心を持ってきたせいでもある。そして、これらの「効果測定」は非常に困難ではあるが、現代の教育のあり方そのものに「学」への要請が内在しているように思われる。

つまり、現代社会における教育の二重構造というものである。

一方に組織的、系統的な公教育というものがあり、一方に個人的、私的な家庭教育が存在する。そして、両者の間のギャップはますますひろがっているようにも思えるのだが、実際には、学校部分が肥大していて、家庭教育が学校教育に従属していると言つてよい。

学校で行なわれる教育は、ますます画一化され、抽象化の度を深めている。そうした中で、教師による生徒一人一人に着目した実践報告がことあたらしく評価されたりするのも、学校という場における「生活」部分の衰弱の兆しでもあるかもしれない。

私たちのおかれている状況は千差万別であり、そこにある情報が与えられても、それを無視することを含めて、アウトトプトさされてくる「現実」の姿は無数にある。それゆえ、子どもの一人一人のおかれている状況を無視して「上」からおろされてくる画一的な「教育論」に対する批判は必要である。

しかし、公教育が管理を強めてゆく一方で、家庭にはたてまえとしての「自由」がある。ところが、私たちはその自由の中で不安となり、あたかもE・フロムの言うように「権威」を求めてみずから縛られようとする。

だからこそ、不安定で自信のない私たちの現実を、「論」にからめとられることなくそのまま突き出す必要がある。とはいえ、育児体験のようなものを含めて、体験や生活の重要性を強調する立場に基本的に共感しながらも、問題を感じないわけではない。

それは、一つ一つの状況を、あるいは現実を見ていくうちに、それぞれの立場を反映した「体験的教育論」の必然性のようなものを感じてしまつて、結局すべての現状を肯定してしまふ多元論

におちいつてしまうのではないかという不安である。

だから、現実に学び、生活者であることにこだわるといふことだけでなく、時に「現実」や「生活」とはまったく異質な次元から衝撃を与える「理論」や「幻想」も必要ではないかと思う。それが私が一概に「空想空論」を否定しない理由である。

(茨城大学)

訂正

二月号(佐藤文字氏「ひとつの推論」)に間違いがありましたので、次のように訂正させていただきます。

P5・6上段

ステイプンス↓ステイプンス↑

P5上段17行目

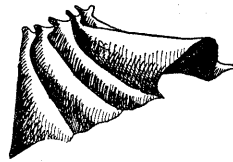
いく程度で↓いく過程で

P5下段11行目から12行目

問題の解決についての方向性のような……

問題の解決について方向性が示されていることが必要です。前述のような……

私の保育



志熊淑子

私は、小学校の教師になるつもりだった。それが幼稚園にお世話になることになって早くも二十年という月日を過ぎた。

私が勤め始めた頃は、幼稚園は今のよう一般化してはいなかったし、社会の認識も浅かった。私もまた幼稚園が何のために存在し、そこで何をするのかなど幼稚園について勉強もしなかったし、ほとんど無知であった。

何をするかが決っていなくて教師に任される部分の多い幼稚園、時間帯のはっきりしない幼稚園、熱心になれば遊びがなく怠けようとすればいくらでも怠けられるような幼

稚園、こうした中で私は自分のしていることの価値づけができず、むなしさを感じることがあった。しかし私が思い惑っている間にも子どもとの日々は確実にその日教を増していく。考えるのはよそう。子どもを育てているのは教師である私だけではない。親もそして地域社会もある。とにかく今私ができることが子どもにとって何らかの意義があると考えよう。そう思うことにした。

その頃の子どもたちの一日は、朝は九時頃まで自由に遊ばせる。ここでは「粘土は出さないで、はさみも出さないで、外へ出なさい」九時頃全園児を一堂に集めて「朝の

会」をする。改めて「みなさんおはようございます」とやるのである。その後、クラス毎に自由に遊ばせたり、一斉の活動をさせたりする。自由に遊ぶについては朝と同じ規制の多い中で、一斉の活動では「これから絵をかきましよう。かかなくてはいけません。友達もみんなかいているのだからあなたもかきましよう。勝手なことをしてはいけません。最後までがんばりなさい。できたら外へ出て遊ばなさい……」といった状態で、小学校でいう休み時間がうんと長くてその中に授業のような活動がひとつ或はふたつと組み込まれたものという考え方であったと思う。

このような生活の中でも子どもが得るものはあったと思うし、何よりも私は若さでせいっぱいかゝわったという意味でもあれはあれでよかったと思いたい。しかし、よく考えてみると、管理しやすいように、私の狭い枠の中にすべての子どもをはめ込もうとしていたように思う。すべての子どもを同じようにしようとし、同じことを同じように期待し要求して枠からはみ出さないように気をつかい、教師の指示どおりに動き、よけいな回り道をしないようにどうルールを敷くかを考えていたようだ。そして、ひとりひとりの発達をみつめること、そこでその子にとって必要な

ことは何かを考えること、個性を尊重し伸ばすこと、内面的な気持を思いやること、創造性や自主性を重んじることなど、幼児の教育において考えなければならぬ大切なことに何ひとつ気づいていなかったような気がする。

しばしば研究会などへも出かけたが、幼稚園の存在理由など私の疑問は解けなかったし、指導者といわれる人達は、ほとんどが幼児に接したことの無い人であったということもあり、何かが通じない、そうじゃないんだという思いにかられることも多かった。そのところを、ことばで言い表わしたり、人に通じるように話したりすることは、今もそうなのだが、難しい私の力は及ばなかった。

倉橋惣三著『幼稚園真諦』を読む。この頃から幼児との生活にそれまでと違ったおもしろさを感じるようになった。私の幼稚園生活はすでに十年になるうとしていた。あれからまた十年経た今、保育について次のように思っている。

型にはめようとするのではなく、ひとりひとりをそのままで受け入れ、そこから始める教育、そこには「おちこぼれ」という意識は存在しない。おさえつけたり、小手先で動かそうとしたりしないで人間と人間のつき合いをしたい

し、子ども同志にもそうした体験をさせたい。具体的な多様な経験をできるだけ多くさせたい。自らしたい事があり、そこにかかわり、試し工夫しがんばりやりとおそうとし、友達とのかかわりにおいて自分が出せ、そこでの問題を自分達のこととしてのりこえようとするのであってほしい。こうした中で、喜び悩み戸惑い満足する気持を大切に受けとめ支えてやりたい。ひとりひとりを大事にしようとする三十人居れば三十通りの生活があると考えたいし、一方でクラス集団をよりよく育てたい——と。

しかし、今もまだ迷いの連続である。止めようか続けさせようか、何を思っているのかどう言うべきかと迷うし、これまで全く気にもならなかった事がある日突然気になってくることもある。何はともあれ子どもたちの様子を一日の流れにそって書いてみる。

四歳児・11月21日（火曜日）の記録から

「おはよう」と次々に保育室へ入って来る。九時十五分、かばんをつけたまま、おしゃべりをしている子どももいるが、ほとんどが持ち物の整理をすませ着替えて自分のした

いことへかかわっている。空箱で作っているグループ。ブロックを組み合わせているグループ、外で追いかけたり追いかけられたり走りまわっているグループ、絵本をみている子など。

和恵と妙子が、ねずみの面をつけて、つみ木を組み合わせ電話を持ちこみ家づくりをはじめ。側にごさを敷きテーブルを置いて妙子が「これでいい？」と和恵に言う。和恵はうなずいてその場を離れ仲よしの利奈へ近づき「利奈ちゃん遊ぼ、利奈ちゃんのところもあるよ」と手をひっぱるが来ない。和恵はあきらめて、ひき返し、「だれかよせてあげたいな」と言う。妙子が「ひとりぼっちでつまんない」と言うが和恵「ひとりぼっちじゃないの、二人ぼっち二人ぼっちと言いなさい」と言う。二人はまたつみ木を動かして家をつくるが、妙子は手を休めて他の友達の方をぼんやり眺めていることが多い。和恵は一生懸命つくる。壁のように並べその上に板を渡そうとするが届かない。組みかえてもう一度置く。今度は届く。そこへ妙子が来て、「これ、ピアノよね」と弾く格好をする。和恵「ばかね」妙子「お屋根よね」和恵「うん」……。

いつもいっしょに行動する利奈、この頃時々逃げるこ

がある。三人の閉鎖的なグループが他とかまわれる機会になるかもしれないと思う。

前日、包装紙を切つて花づくりをした佳子「お花つくるから紙ちようだい」と要求する。場をつくり、糊・はさみを出し他の六名の女の子達と話しながらつくる。糊の使い方がうまい。細長い紙を輪にして花びらにする子、短く切つてそのまま花びらにする子、輪つなぎのような花、八重、一重、大きい花、小さい花とさまざまである。暢が「ほくもつくる」と来る。彼は細長い紙を長くつなげ「ほら」と得意げにみせ、しばらくつなげることに夢中であつたが、やがて花をつくり始める。

誠一が「絵がかきたい」と言う。画板、画用紙、絵の具を用意し、かく。今日はSLでなくブルドーザーである。終わるとそのまま逃げる。気の向くままにつっぱしり、他に耳をかさない彼、片づけにおいても自分は片づけようとしなない。少々強引に片づけることを要求してみようと思ふ。しぶしぶだが片づけた。

宗近が「ラーメンやがしたい」と言う。場をいっしょにさがす。宗近と裕資、テーブルに向き合つて座り粘土をまめる。裕資はひだ状にした粘土を、スチロールのどんぶ

りの底にあけた穴へとおそうと夢中、なかなかとおらない。やっとなおったと思うとするりと抜け落ちる。粘土の片方をテーブルにくつつけてとおすことに思いつく、成功、ニコッと笑ふ。そんな彼に宗近は「ラーメンや」と言い続ける。裕資には通じない。ラーメンやへの援助をしようかなと思つているところへ幸太郎が「よせて」と来る。宗近は即座に「いや」と言う。幸太郎は「何かいね、幼稚園のものよ、悪いねえ」と口をとがらせてぶつぶつ言い続ける。宗近は「いや」と言いながらも幸太郎のぶつぶつに応じ結果的には三人がそこで遊ぶことになる。

美しく色づいたもみじを陽子が私にくれた。他の遊びを傍観している明子に「これでおかしができないかねえ」と言う。「できる」と言う。机を出し、粘土で葉を使ったおかしをつくる。明子もつくる。「何してるの?」「わあ、きれい」「これもみじでしょ」「私もしたい」と人数が増す。場が狭くなり広げる。「お店にしよう」「ケーキやさんよ」とつくったケーキを机の上のつみ木の上に紙を敷ききれいに並べる。大きい丸形の上に小さな丸形をたくさん並べ等間隔にもみじの葉を置いたもの、棒状のものを渦巻きにしその上に葉を置いたもの、粘土の中に葉を巻き込んだもの

など、私など思いもつかないようなおいしそうなケーキが
沢山できた。「今度はねえー」と考えながらつくる。もう
私は居てもいなくてもいい存在である。

暢が「これください」と来る。加奈子が「はい十万円で
す」とすぐに応じる。「はい」とお金を出す真似、受けと
る真似、食べる真似「ああおいしかった」と言う。加奈子
が私のところへとんで来て「暢ちゃん本当に食べちゃっ
た」とくっくっくと笑う。葉を本当に口に入れたらしい。

利奈来る。「ごめんください」「はい」と明子と華絵子が
応じる。「ケーキください」「はい、こちらは十円こちらは
百円です」「お金がない」「あのね、小さい紙でいいんですよ」
利奈紙切れをさがして持ってくる。「はい、お金」「はい、
ケーキ」「あのう、ちょっと包んでください」「はい、かし
てください、お待ちください（包んで）お待ちせしました
ありがとうございます」「さようなら」利奈は、別のコ
ーナへ行きそっと包みを聞く。ケーキを手にとり眺めて
「きれい、きれいだな……」と言いままた包む。他の子ども
達もお金を作ってはケーキを買いに行く。

誠一が猛然と入って行き「ごめんください、お酒くださ
い」と言う。陽子が「お酒はありません」と言うと、並べ

てあったケーキをぱつと床に払い落として逃げる。瞬間の
ことで、みんな安然としていたが、後もだれも誠一に何も
言わない。また彼が入って行きそうな気配を感じ、私は、
このケーキやを彼にこわされたくないと思い「先生、ガー
ドマンになるう」と入る。すぐに誠一が来て「店の人にな
りたい」と私に強く要求する。他の子へ言うように言うが
それはしないで私に要求し続ける。他の子は不安そうな表
情で事のなりゆきを見守っている。どうしようと迷ってい
る私におかまひなく彼は強引に店の中央に座りこむ。そし
て、「いらっしやいらっしや千円、千円」と叫ぶ。だれ
も応じない。すぐ出て行く。

幸太郎がスチロールの皿を抱き合わせるようにしてつく
った財布に、かまぼこ板のお金を入れ、ニコニコして店に
来る。「ごめんください、ケーキください」「はい、どれで
すか」と話しているときまた誠一がくる「ごめんください、
この店をください。お金はいっぱいありますから」と大声
で言う。彼はかまぼこ板に「1000000」と書いたお金をふ
りかざしている。幸太郎のスチロールの財布をみつげ奪お
うとする。「いや」「かせ」「とくみ合う。私が近づくと
誠一は逃げる。大金を置いたまま。そのお金をみつけた陽

子が加奈子に「これねえ、ものすごく高いお金よ」と言う。「大事にせんにゃ」「うん、この中に入れとこ」とひそひそと話し包装紙の間にしまいこむ。

すでに10時25分、部屋の中は、ねずみの家、キーキヤラーメンや、ブロック、つくる場といっばいに広がっている。11時降園なのでそろそろ片づけなければならぬ。このまま置いておきたいという要求を受け入れ大まかに片づけることにする。

一日の流れが、いつもこんな風だというわけではなく、時間を切ることも一斉にすることもある。観る人は「自由保育ですね」「こんなだと運動会などどうなさっているのですか」などと言う。なぜ、自由保育、設定保育などと決めつけるのだろうか。自由保育と自他とともに認めている園を参観した。考え方がある部分で私とは、全くちがっていた。いろいろな形態を必要に応じてとればいい。

幼児期に仕上げが大切であると言われる。しかし、仕上げの内容や方法になると、その考えている事は同じではな

いようだ。親や教師の言うことを聞き、すべてきちんとできることを最初の段階から要求し、ここがまんずすることをも意味づけようとしているように思えることが多いが、そうだとすると、経験の幅だ、自主性や創造性を培う場もうんと狭くしてしまうことにならないか。幼児期に型にほめてでもしつけておきたいことは何なのか。

仲よくするとか、生き者をおかわいがるというようなこと、それをめざす過程では、けんかをしたり、意地悪をしたり、結果的に生き物を殺すことになったりというようなことを認めた上での援助が必要な時もあると思う。このところをきれいごとですませようとすると形だけであったり、ごまかしたりするのではないか。

何か目に見えることを教えてほしい、できるようにさせてほしい、自分の子が他よりもすぐれていてほしい、いい子と言ってほしいと願う親の期待の中で私のような保育をしていると、その意味するところや必要さを機会をみつければ話し続けなければならない難しさを感じるが、枠にはめた経験があるがゆえに今の保育を大切にしたいと思う。

(山口大学付属幼稚園)

手——周郷 博先生に

田村さと子

「林に太陽が巣ごもって

太陽の卵がいくつも生まれたから

見にいってくるよ」

とでかけられてから

ずいぶん お帰りが遅いですね

スケッチに夢中になっていらっしやるのでしょうか

みどり道で迷っていらっしやるのでしょうか

キャンバスが重くはありませんか

まだ春には少し間があるけれど

ひなにかえった太陽が

湿りけをとりもどしはじめた大地を

ういういしくみつめている午後

ローソクを灯して

先生がお弾きになった

オルガンのテープを流していると

キイを押すちいさな手が

炎の奥に見え隠れしています

さわらびのように跪いている

お祈りの姿が

賛美歌といっしょに立ちのぼります

こうして

人生いのちにゆき悩むときには いつも

さしのべてくださる

あのつつましくあたたかな手を感じるのです

子どもとの出会いの中で学ぶこと ①

水 沼 昭 子

「ファックユーン」「ファックユーン」……ブロックを手にM子が、私、目掛けて走って来た。はじめの内は、この「ファックユーン」が何であるのか気づかずにM子の動作をただ見つめていた。その私の姿勢にM子は、「オヤッ？」といった眼差しを向け、続いていたずらっぽく又「ファックユーン」と手を伸ばして私を狙う動作をした。その時はじめてM子の手のブロックがピストルで、私は狙われ射たれるのだと感じ、その場に倒れた。倒れながら「ファックユーン」はピストルの発射音だと了解した。そして同時に「いよいよ、始まった」と思った。M子は自分のイメージ通り狙った相手が倒れたのを見て、くるりと後を向いて自分の部屋へ駆込んでいった。その後姿が解放的で柔らかに感じられた。

M子はそれまでほとんど動こうとはしない子であった。入園して数ヶ月がたって、どの子ども園生活のいろいろな場面に

慣れはじめ、保育者との関わりを基盤にして、友だちの中に
出て行く様になってもM子はテラスや部屋で動こうとはしな
かった。遊びに誘い込みたい気持を押えながらM子のまわり
で保育者も楽しく、遊んでみせた。そうした場面の中で全身
を堅くして、まるでM子の周囲に見えない壁があるかよう
だった。この壁を保育者が破るか、M子が破いて出てくる
か——。私達は保育後のミーティングで話し合ってから後者と
り、「待つ」ことにした。M子から働きかけてくる事を信じ
て「待つ」ことにした。

そうしたプロセスがあつての「ファックユーン」であつた
から、倒れながら「いよいよはじまった」と思つたのであ
る。M子が自分から堅い壁を破いて私達の側へ働きかけて来
たのだ。もっぱら「ファックユーン」だけではあつたが、はじ
めて私を倒した日以来、だんだん行動範囲が広がっていつ

た。狙われるのは、まだ保育者だけであつたが——。このよ
うな状況を保育者達は全員で受けとめることにした。「Mち
やんに狙われたら射れて倒れてやろう」と申し合わせた。テ
ラスや部屋、ホールで保育者達は射れ倒れた。第三者が見た
なら喜劇かもしれない。反対に非教育的だと批判を受けるか
もしれない。しかし私達は、M子の、その時の働きかけをし
っかり受けとめたかつた。M子の行動を共感したかつた。な
ぜなら、一人一人の子どもが、仲間を集団と意識し、近づい
てくる方法は種々あつてそれぞれ異なる。そのやり方をまず
受けとめるところから出発させたいと願うから「ファッキ
ーン」と受けてやりたいと思つた。

M子の場合、周囲のおとなが、どう彼女に近づこうかと緊
張してしまうほど、いわば大人側にとって「つきあひにくい
子」であつた。そのM子がいたずらっぽく相手をみつめ、フ
ァッキューン」と弱々しい声でピストルを向けてくる。この
一発を全身で受けとめてやりたい。やらなければならぬと思
つた。そして、M子のこの働きかけが、それまで全身を堅
くしてテラスや部屋で立ち続けながらも、周囲の子ども達の
遊びを受けとめ、共感し、やがて自分の力にして、外側へ向

けて来たことを思う時「あなたはどのようにして遊ばないの」と答
めずに「待つ」ことを選んで良かったと思う。

M子の「ファッキューン」が「せんせいあそぼ〜」と聞え
て来る。次はどうM子の遊びを広げようか……と逸る気持を
押えて、まずはM子の今の心もちに私の心をあずけて行きた
い。

一人一人の子どもの心もちを受けとめるにはあまりにも保
育者として小さい自分を思う。子ども達の投げかけてくる心
もちが、サインが何であるか理解できずに、ただただ悩んだ
りまよったりする時、その悩み、まよいを心に留めて、した
すら、子ども達の生活の中で答えを求めるだけである。「あ
のサインは、このことだったのか」と子ども達の行動が、働
きかけが教えてくれる。そのことを感じとれる心を持ち続け
たいと思う。

M子のピストルが、保育者としての私の心の大事な部分に
狙いを定めてくれた。次は、どの様なサインを投げかけてく
るのか。M子の毎日を受けとめて行きたい。

(千葉・愛隣幼稚園)

『復刻・幼児の教育』〈大正・昭和篇〉

〔趣旨〕

『幼児の教育』誌は、明治三十四年『婦人と子ども』と題されて創刊されて以来、今日に至る迄八十年の長きに亘り、わが国幼児教育の発展と歩みを共にして来た。この間、幾多の先駆的保育理論、実践研究発表等が誌上を飾り、わが国の幼児教育の発展に測り知れない寄与を成して来た。現在まで継続する幼児教育専門誌として、わが国最長であるのみならず、雑誌出版史上、極めて稀な例を示している。

本書は、昨年刊行の『復刻・幼児の教育』第一期・明治三十四年～大正九年)に続き、大正十年～昭和十九年の二十四年分、二十四巻を、一挙に復刻刊行するものである。大正・昭和期はわが国幼児保育が日進月歩の高進を示し、時代背景もめまぐるしい変貌を遂げた時期にあたる。

わが国の幼児教育の進歩の様相を概観する好個の原資料として、また先達の抱負や熱意の結晶する稀有な文献として、

現代保育を考える人々に資することを念願する。

〔体裁・内容〕

全二三巻、別冊著者別索引

〈第一一巻～第四四巻〉大正十年～昭和十九年

『幼児教育』(第二三巻第八号まで)

『幼児の教育』(第二三巻第九号以降)

〔刊行〕 名著刊行会

〔定価〕 現金価格二二五、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 千代田区神田神保町三二二五 精和ビル

TEL (〇三) 二九五―三五六一

大阪本社 大阪市西区北堀江町三一六―二三

TEL (〇六) 五三一―九八〇一

『幼児の教育』復刻記念懸賞論文募集

このたび、雑誌『幼児の教育』復刻を記念して、左記の要領で論文を募集することになりました。多くの方々が、優れた論文をおよせくださいますことを、期待しております。

〔記〕

一、第一期、第二期の復刻『幼児の教育』を素材として、独自の考察を試みたものであること。

一、応募期日 昭和五十六年九月末日まで

一、応募要領 ペン書き（またはボールペン）とし、四百字詰縦書き原稿用紙に四十枚以上百枚

以内。上表紙に「復刻記念懸賞論文」と朱書の上、「論文題目」「姓名」「住所」「所属」を記入のこと。審査は上表紙を外し、本文のみを対象

として行ないます。尚、名前入りの原稿用紙は御遠慮下さい。

一、賞金及び賞品 最優秀賞一名 賞金二十万円

二等賞 二名 五万円

三等賞 三名 一万円

参加賞 全員 記念品

最優秀論文は、本誌に掲載いたします。

一、問い合わせ先及び応募先

〒112 東京都文京区大塚二―一―一 お茶の水女子大学附属

幼稚園内 日本幼稚園協会『幼児の教育』編集部

尚、電話での問い合わせは御遠慮下さい。郵便でお願いいたします。

主催 『幼児の教育』編集部
後援 株式会社コーディック

『希望の哲学』

O・F・ボルノウ著

小島威彦訳

新紀元社

著者ボルノウは、一九〇三年にドイツに生まれた哲学者・教育学者で、彼の哲学はデイルタイの生の哲学とハイデッガーの実存哲学に源泉をもち、現在では、彼独自の哲学的人間学を背景にして教育学を考究している、現代を代表するユニークな思想家の一人と思われる。

『希望の哲学』は、一九五九年の晩夏にボルノウが日本を訪問した際に、諸大学の講演用のために編集されたものである。講演用かつ彼の初期の著に相当するので、かなり非体系的である。が、彼の根本思想が充分に成熟・分化していない

状態でほとんど全て表現されていると思う。従って、この本について語る事は、ボルノウ哲学全体を語ることであり、とても私の任ではない。この本と出会うまで哲学は超観念論であると偏見を抱き読まず、近代精神史、哲学史の知識も皆無に等しい私である。だから全く個人的・現存在的な閉じられた視点でこの著の紹介・感想文に終始する危惧を感じる。ともかく私には生き方にかんがりの影響を与え、生涯忘れられない本の一冊となりつつある。

まず、構成としては、“希望”“人間と

空間”“信頼”“実存主義克服の問題”“理性と非条理”“人間と技術”“平和とは何ぞや”と続いている。各章は、ボルノウ哲学に各方面から違う色のスポットライトを当てたようなもので、部分と全体が密接に、有機的に相互関連している。部分が柱となり、本全体が、一軒の“家”のような空間を形成している本であると感ずる。そして、全体を貫通する二つの大きな流れ——“希望の人生に対する積極的な意味づけを新たに人間学的観点から確立”と“実存哲学の克服”が各章で具体的に述べられ深められている。部分と全体が相互循環的に理解を深めていく。

しかし、哲学書としては、比較的平易な文章でありながら、読み込むほどに底知れぬ内容の深さと重厚さがあり、私とこの書との大きな隔たりを見る。それは、一つには随所で、リルケ、ゲーテ、サンテグジュペリなどの詩人、作家達の作品を引用することで、ボルノウの直観

が働き、理論的叙述が展開するからではないか。感性に直接訴える表現が実に多いのだ。知性のみでボルノウの哲学を理解するには限界がある。読む方も直観と感性を大いに働かせ、自己内省をする。しかも、人間を越えた絶対的存在―特定の宗派の神ではなく―を信ずる境地なくしては、『希望の哲学』は彼岸にあると考える。つまり、即役立つ知識を期待しても無理なのであって、科学的・理論的思考のみでは、ボルノウの哲学の評価は低いかもしれない。一冊の本を、一人の人間と対話するように読む。人間らしい読み方、自由に、自然に読む。『希望の哲学』にはこれらのことが要求されている。しかし、時を急ぐ現代人には、それがむずかしいのではないか。『希望の哲学』の難解さは、読み手の人間性喪失の進度に相関しているのかも……。

第二点として私が考えることは、ボルノウ自らが、常に自己の内面深く潜む実存的孤独・不安と闘い続けていることだ。ニヒリズム、虚無主義などの実存主義的表現は、私たちの日本人にも身近ではあるが、そんなものの比ではない想像を絶する暗い底知れぬ気分なのだろう。その中で一節の光を求めるごとく「希望の、生の哲学」を人間の本質として生み出していく。単純に、ロマン主義・理想主義のもとに一方的に書かれた他の書とは厳然と違うのだ。だから実存的不安や絶望、死への恐怖の体験をくぐりぬけた思想家としてボルノウを把握することなくしては、結局、何も語れないのではないか。しかし、現在の私には本質的に実存主義の体験は不可解だ。だから、希望が、信頼がどれほど人間らしく生きるのに必要なかを胸にグサリと来る迫切感を感じられない。そこには越えられぬ壁があると思う。けれども、戦中・戦後の動乱の時期を体験せずとも、高度成長・著しい欧米的近代化の中に育った私の内面には、虚無的な漠然とした不安があると感じる。ボルノウが一九五五年当時直面した精神的荒廢は現代にも綿々と続いているとしたら、各自が、内面的虚無・

不安などと対決しながら読まずしては、ボルノウに迫れないのではないか。しかし実際の緊張を伴う苦しい作業である。日常怠惰な雰囲気暮らしには、困難な事であった。以上の事は、一般的には表面的に思想を吸収しながらも依然として、日本固有の文化伝統に暮らし日本人が、あちらの思想書を読む際に直面する問題点に通ずると思うのだが。少々我流に傾きすぎたので、次に及ばずながら、この著の内容について、ボルノウの考えと私見を簡単に述べてみたいと思う。

ボルノウは、『希望』の部分で「希望の機能を正しく基礎づけることができて初めて、実存主義をその固有の核心に逆登って克服しうる展望が開ける。そして希望は特に重要な哲学の対象である。」と『希望の哲学』の目的の一つを明確にしている。しかしボルノウの希望は言語で明確にされない。「特定の対象をもたず、経験的に確かめたり打ち消したりできる個々との小さな希望を越えたところにある人間存在を究極的に支える地平線であ

る。それは生存に対する信頼であり、「希望は人生を人としてつまり未来をめざす行為と努力として、初めて可能になる。」さらに、ボルノウは、希望を時間論の中に展開する。「希望は未来に対する或る特定の態度である。人間の生の時間的構成は根源的には希望によって決定されるものである。」このように、ボルノウ哲学の特色の一つとして、神学の対象ともなる信頼・感謝・希望などの徳を統一体として、過去・現在・未来に対応する時間論の中で追究していく方向がある。空間論にも共通するが、物理的・数学的時間・空間でなく、具体的に人間の体験の中に呈示される時間・空間を、主観的にそのまま問題にしている。決して一般的に測れない人間の内的時間・空間であり、心理状態により大いに变化するものなのである。一見、非科学的な論に思えるが、合理を越えた生きた人間の時間・空間を的確に把握している。希望は、実際に「アルキメデスの点」である。自分の内と外の世界をあるがままに直観的に感じること

ができない大人の世界には、異質の時間論、空間論があるだろう。けれども、子どもにとっての体験的時間・空間は、かなりボルノウの考えに近いと思える。もちろんボルノウは児童学者ではない。がこのことから生きた人間の体験に深く沈潜してその本質・根源を考える一つの学問の流れと、子どもから学ぶ一つの流れが、「人間を考える点では共通しているのではないかと考える。どうだろうか。」

さらに「家」を内的空間として、家の建設を人生の建設に考える「空間とは何か」の章も、子どものおうちづくりの遊びを考えると興味深い。だが何故、ボルノウの視点が（私の勝手ながら）幼児にまで広げられるのか。考えるべき問題と思う。これに関して特に「信頼」の章がその鍵を与えているのではないか。ここでは、信頼の喪失、人間相互に潜む不信に満ちた当時のドイツの状況の中で、新たな信頼関係を生ずるために信頼の本質を厳しく見極める意図で述べられている。まず日常使用される信頼とそれに類

似する用語の意味を掘り下げる。次に、母と幼い子を中心とする「まどい」の世界に人間の信頼関係の本質・原理を追求する。ボルノウは母と子の世界に注目している。「子どもは母（特定の個人）に対する信頼が母とのまどいの中で充分育つ後に、現在を、未来を支える世界全体に対する信頼をもちうる。」ボルノウが人間を支えるとする信頼・希望は母と子の世界の中で芽生え育つのだ。このように子どもの世界に人間の根源を見い出そうとするボルノウの立場は児童学に共通する面があるのではないか。また幼き弱き存在を大切に愛し見つめるボルノウの人間性も、彼の哲学の大きな背景を感じる。さらに次の言葉は直撃かつ辛辣だ。「信頼には常に冒険・賭けという意味が含まれている。自分を賭けることは信頼の最も深い本質の一契機として、きつてもきれない。信頼の確からしさは、自らを信ずる、心を無条件に傾け尽くすことに基づいている。」「教育者は信頼の義務をもっている。」私は、この言葉が観念的

なものではなく、教育者としてのボルノウの長く地味で真剣な教育体験の中から生まれた珠玉の言葉であると感じる。

思わず「自分は冒険をするだけの勇氣があるだろうか」と問わずにおれない。自己反省を迫るボルノウの鋭く厳しい言葉はこの著には多い。それはボルノウ自身への問いかけだと思える。最近のボルノウの著に教育学関係の本が多いが、これは、自らの生活実践の中に論を展開、深めていく態度を反映していると考えられる。具体的に体験の記載はなくとも子どもに係わる私たちが学ぶ点が多い『希望の哲学』である。

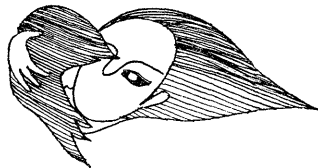
だからこそ、ボルノウ哲学は、私たちが日常の子どもとの生活の過程で希望、信頼、空間などの諸テーマを行為を伴い追究、思索することで本当に理解し評価できる。そして再度読み直すときまた別の面が見えるおもしろさがこの本にあると思う。しかしボルノウは本当の信頼や希望は「決して意志の力では得られず一つ

の「恵み」であり、努力する行為によつてのみ近づける。」と常に断言する。確かに信頼や希望を得るための明確な方法などないのだ。それなのに、それ以上のものを求める現代は、自らを賭けて希望・信頼を求める努力を行為を忘れているのだ。「安易に母子関係における信頼の欠如」などと暴言するべきではない。信頼や希望は恵みなのだから、また、エリックソンも心理学的に信頼・希望・空間を扱っているので比較するのも興味深い。

残りの各章では、現代社会のかかえる急速な近代化に伴う精神的問題に、ボルノウの哲学的人間の観点から一つの解決方向を示している。それはまず個人との内面の充実が始まる時間を必要とする方向だが、子どもも含んだ人類の幸福の方向と思う。

読み終わり本を閉じると、目の前に彷彿とボルノウの姿を感じさせる『希望の哲学』は、ボルノウその人と言えるだろう。冷静・客観的かつ情熱的、専門性は

問わず、「自分が生きる」問題に直面した時に、一読の価値が大いにあると思われる。
(矢部ひろみ)



海外文献紹介

What is Early
Childhood Education ?

Some Definitions and Issues

Norma R. Law

Childhood Education

February / March 1979

近年、乳幼児期の発達及び教育への関心の高まりは著しく、幼児教育が盛んに論じられるようになってきた。しかしながら、幼児教育そのものが意味するところは、必ずしも明確にされているとは言えないであろう。

この論文では、まず「幼児教育とは何か」という根本的な問いが、子ども、両親、教師、社会のそれぞれの側から問い直され、

さらに幼児教育における幾つかの問題にも触れられている。論文の筆者ロー (Law N.R.) は、カナダのブリティッシュ・コロビヤ大学の元教育学教授である。

ローによれば、第一に、子どもにとって幼児教育とは「遊びと学習の場」である。家庭であれ幼稚園であれ、子どもは日々の遊びの中で絶えず学び続けている。ことばを覚えたり、物事の相互作用を確かめたり、技能を訓練したり、問題解決を行ったりするには、それこそ相応な遊びの積み重ねが必要である。そのような遊びのもつ意義と活力が強調されている。また、子どもは家庭への愛着は持ち続けながらも、自ら家庭を離れ、外の世界へと活動を広げたいと願うものである。こうして出会う新しい自然的社会的環境との関わりの中で、次第に人間社会の一員としての心構えが養われていくのだと述べられている。

第二に、両親にとっては、幼児教育は「育児への協力」であり、それは直接子どもになされる世話のみならず、親としての仕事に関する親自身への指導や援助も意味するとしている。両親は子どもの発達についてもっとよく知り、より効果的な教育方法を聞きたいと教育関係者に頼る一方で、親としての個人的な選択権は侵害されたくないと考え、両親と教師とは子どもという共通の関心でつながっている。両者が、共に理解し尊重し合ってはじめて

て、子どもの利益は守られるのだとローは主張する。

第三に、幼児教育とは、教師にとっては「専門家としての選択」であると定義されている。幼児の発達は絶え間なく急速であり、様々な技能の獲得も不安定であって、その教育のあり方もまた一律に規定し得ない。従って教師は、このような茫漠とした状態の中で、常に為すべき事の責任ある選択を強いられているのである。

第四に、幼児教育は、社会にとつては「投資」であるとされている。子どもはすべての地域社会における原動力であり、彼らの保護と教育は、地域的な投資であると共に全世界的な投資でもある。社会は、子どもと社会それ自体のために幼児教育を必要とすることが説かれている。

以上のように、幼児教育の意味は四者の間で違いはあるが、その目標とするところ、すなわち、子どもの身体的、精神的、情緒的並びに社会的な発達を指しているという点では一致しているであろう。しかし、実践の段階になると、その方法について互いに食い違いが生じる。子どもの養護や教育の仕方に関して、完全な一致を求めようとすることは不可能であるし、幼児教育の観点からは、かえって不自然でもあろう。それ故、必然的にこの分野はいつも多くの問題を抱え込むことになるのである。

ローは、現在共働きの増加により各地域で試みられている、子どもの保護及び教育のサービズ活動について、子どもにとっては家庭保育と集団保育のどちらの側面も必要であり、子どもの発達の要求に合わせて融通性のある方法が取られることが望ましいと主張する。

次に彼女は、文化的多元論を唱える中で、教師にとつて「子どもの立場から発すること」は、個々の子どもが育てられている家族とその文化的な生活様式とを尊重することであると、社会学的一般概念の適用における危険性にも言及している。さらに、多種の国における文化的統一運動や、一九六〇年代幼児への貧困対策にも触れ、それらが共に未来に対する保証を重視しすぎていた点を批判し、幼児教育は第一に、現在を約束するものでなければならぬと力説している。すなわち子どもには、現在において自分たちが、物と活動、子どもと大人、感情と理念の世界を自由に探索できるように、安全で計画的であり、しかも融通性のある環境が必要なのであるとローは訴えている。

(田口玲子)

ブリュエルの「子供の遊戯」(1)

— 作品成立の背景 —



「ピーテル・ブリュエルの肖像」
エギィディウス・サードラー刻 銅版画 1606年

森 洋子

連載のはじめに

昨春秋、筆者はロンドンのヴィクトリア＆アンドーアバーアート美術館近くの書店で、偶然表紙カバー全体がブリュエルの「子供の遊戯」を使用している *Philippe Ariès, Centuries of Childhood* を購入した。さらに昨年十二月邦訳された同書（『子供の誕生』杉山光信、杉山恵美子共訳、みすず書房）でも、表紙に同じくこの絵の部分図がレイアウトされていた。云うまでもなく、アリエ

スの書は格別ブリュエルのこの絵について論じているのではなく、むしろ西洋美術史を専攻する私の専門外の書であり、アンソーン・レジーム期以後の、学校や家庭における子供の教育の歴史を論じた教育関係の研究書である。このようにして、案外、ブリュエルの「子供の遊戯」は、幼児関係の書物に挿絵やカットとして使用され、本誌の読者に親しまれているのかもしれない。しかしこの絵に画かれた九十近くのフランドルの子供の遊戯について、これまでわが国ではほとんど紹介されていない。そこで今月号から数回にわたって個々の遊戯を解説してみたいと思う。しかし筆者が長年蒐集した欧米の文献においても、かならずしもすべての遊戯の内容や玩具が解明されているわけではないので、本稿でも執筆の段階で不明な箇所も出て来るかもしれないが、幼児教育の専門家である読者からのご教示を是非期待したいと思う。

また本誌の読者の多くが西洋美術史を専攻しておられる訳ではないので、編集部のご意向もあり、初回はブリュエルの時代、彼の略伝、そして「子供の遊戯」が彼の様式発展上のどういう時期に位置するか、などから始めたいと思う。

一、国際商業都市アントウェルペン

ブリュエルの生きた十六世紀は、とくに北ヨーロッパにおいて宗教改革をめぐり、皇帝と諸侯、また国王と民衆の間に旧・新教の激しい争いが展開された時代であった。またブリュエルの生涯の前半、画家として活躍したアントウェルペンは、ヨーロッパでもっとも活気あふれた国際商業都市のひとつである。同市のスヘルデル川には沢山の外国船が停泊し(図1)、市街にはポルトガル、南ドイツ、イギリスなどからの富裕な外国商人が商館を構えていた。また同市はBook Industryのセンターとして、ヨーロッパの知識人の注目を浴びた。一五〇〇年から一五四〇年にかけてネーデルラントで四〇〇冊の本が発行されたが、その中の二二五〇冊がアントウェルペンで出版されたものである。さらに同期間、ネーデルラントで活躍していた一三五軒の印刷屋のうち、六八軒がアントウェルペンに所在していた。一五五五年、クリストフ・プランテイン(図2)が出版屋を開業してから、アントウェルペンの書籍産業は飛躍的な発展をとげる。彼はネーデルラントで使用されていたフランス語、オランダ語だけではなく、ヘブライ、ギリシャの古代語のほか、西、英、伊、独語などの多国語の文献を出版し、国際的な取引を展開した。それらの内容は古典文学や哲学の翻訳から、外国人著者の研究書の出版その他、医学、植物学、地理学、辞書など広範囲に及んだ。彼一代だけでも約一

◀ 図1 「アントウェルペンの景観とスヘルデ川」
銅版画 1562年



▲ 図2 「クリストフ・プランティンの肖像」油彩

五〇〇冊の書籍を出版したといわれる（最近、全出版物のマイクロフィルムが刊行されたと聞くが）。こうしてアントウェルペンが国際的な出版取引のセンターとなったということは、同市に著述家である学者や人文主義者たちが多く集まり、知的、文化的水準が向上したといえるであろう。スペイン人ベニート・アリアス・モンターノはスペイン王フェリペ二世の命で故国から同市に赴任し、プランティンの店から出版される多言語聖書の編纂に三年間従事した。^{註1}このように外国人が出版を指導することも珍しくはなかったのである。

このほか、版画の出版に関しても十六世紀前半のニュールンペ

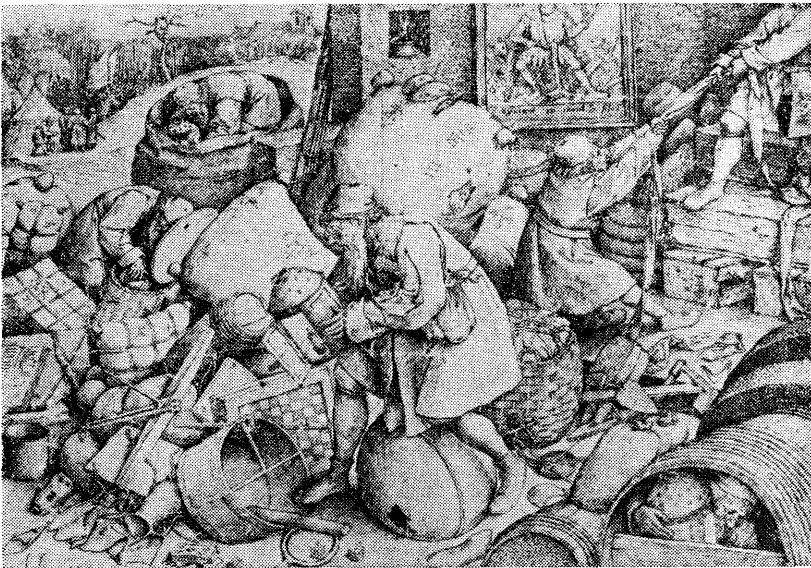
ルク（ドイツ）に次ぎ、十六世紀後半は、アントウエルペンがヨーロッパ一の発行数を誇ったといわれる。同市の最大規模の版屋はヒエロニムス・コック（図3）の「四方の風」で、若きブリュゲルもこの店で約八年間、専属の下絵画家として働いたのである。コックの発行した版画は、大抵その余白に、ラテン、フランス、フランマン語のテキストが添付されていた。そしてそれらを書いたのが、コックの店に入りにしたアントウエルペンの人文主義者たちで、著名な道徳思想家D・V・コールンヘルトもそのひとりとして推定されている。コック自身もアントウエルペンの修辞



▶ 図3 「ヒエロニムス・コックの肖像」

銅版画 ヴィーリックス刻 1572年

▼ 図4 「誰でも」 ピーテル・ブリュゲル 下絵素描 1558年



家集団「あらせいとう」の座長をしたこともある詩人であった。

ブリュッゲルはコック周辺の人文主義者たちを通じ、一介の下絵画家としてではなく、多くの知友をもつ知識人に成長していったのである。それは彼の種々の主題をもつ版画作品から窺うことができる。例えば、アルプスの雄大な景観を謳歌した大風景シリーズ、キリスト教での罪の内容や徳の実践を表わした「七つの罪源」「七つの徳目」シリーズ、ほかに「錬金術」などの諷刺版画、村祭や結婚式などの農民の風俗、諺シリーズなどがあげられる。実に一画家としての才能だけでは表現しつくせない、多種多様な「世界劇場」が展開されている。例えば一五五八年の「誰でも」と題された版画の下絵(図4)は、人間のエゴイズムを寓意的に表わしているが、一五六三年のアントウェルペンのオメハング(世俗的な色彩の濃い市民の祝祭行列)に大きな示唆を与え、そのテーマは統一モットーとして選ばれたのである。^{注2}ブリュッゲルの版画では、フランドルの三つの諺「誰でも自分自身を求めろ」、「誰でも最も長いものを得んとして引つ張る」、「誰でも自分自身を知らない」が、その衣服に、ELCK(誰でも)と書かれた老人たちの行為によって表現されている。そしてこの三つの諺がオメハンクの主題歌「新しい歌」の歌詞の中に唱われたり、また山車の上の活人画に具体的に描写されたのである。例えば、第

二山車で、乾草車の上に、サテュロスが坐り、その下では「高利貸し」「両替屋」「小間物売り」など、あらゆる職業の民衆がでるだけ多く乾草を引つ張ろうとする。そして、この行為は、ブリュッゲルの版画での第二の諺「誰でも最も長いものを得んとして引つ張る」の情景を想起させる。

こうしたブリュッゲルの一点の版画を論じるだけでも、諺といつた民族言語学、また市の祝祭行列といった文化的背景などにまで溯源しなければならない。

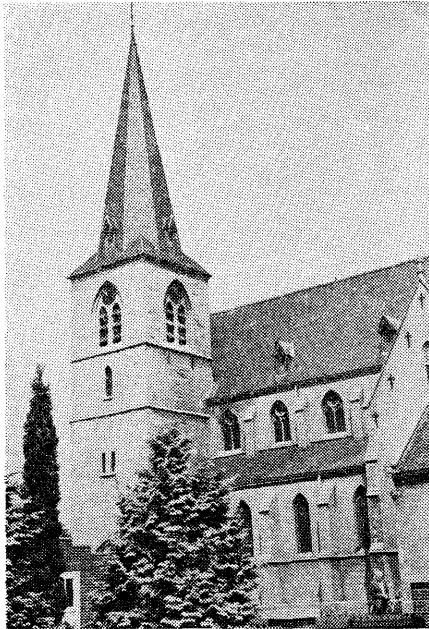
二、ブリュッゲルの略伝

十六世紀の画家については、ドイツのデューラーのように、詳細な家譜・回顧録や、彼の「ネーデルラント旅行」のように金銭出入納簿を兼ねての几帳面な日誌をつけた場合は例外として、一般にはごくわずかなドキュメントしか知られていない。ブリュッゲルもその例外ではなかった。公式の記録として残されているのは、第一が一五五一年の画家組合の登録、第二が一五六二年、マイケン・クックと結婚した時のブリュッセルのノートル・ダム・ドラ・シャベルの結婚記録、第三が一五六九年、同教会で行なわれた彼の葬儀記録の三つのみである。しかし同時代の画家たちに比



▲ 図 5 クライネ・ブローヘル村やエント
ホーヴェンを示す道路標識 (筆者撮影)

▼ 図 6 クライネ・ブローヘル村にある
シント・ウルゾラ教会 (筆者撮影)



較すると、ブリュエゲルの作品に関しては、コックが彼の版画に発行年度と下絵画家としてのブリュエゲルの名を記録、さらにその油彩画作品の多くにブリュエゲル自身、制作年代と署名を残しているため、模式的発展を展望するのは容易である。

ブリュエゲルの死後三十五年して、オランダの画家カレル・ヴァン・マन्दルはその著『画家伝』(一六〇四年)の中で、プリ

ュエゲルについてこう記している。「実に素晴らしいことに自然界は一人の人間を発見し射止めたが、それは、その人間によって自然界が再び射止められるためでもある。そのことが起こったのは、自然界が、ブラバントの見知らぬ村の農民たちの中から、彼等を絵筆をもって描き出すためにその人間を選び出し、絵画芸術にわが永遠のネーデルラントの榮譽を喚び起こした時である。つまり、その人間とは、非常に精神力も機知もあるピーテル・ブリュエゲルという人で、ブレダからあまり遠くない、ブリュエゲルという村に生まれ、その村の名を自分の姓とし、彼の子孫にも遺

したのである。^{註3)}

このマンデルの記述から、今日、ブリュッゲルの生地として三つの候補地が挙げられている。第一がオランダのエントホーヴェン近郊にあり、今日もブリュッヘル Bregel と呼称されている村。第二と第三はベルギーのリンブルク州に位置し、両村とも隣接し合ひ、フロレーテ・ブローヘル Groote Brogel とクライネ・ブローヘル Kleine Brogel (図5、6) という風にならぶ。小で区別されるブローヘル村(つまり地名ブリュッゲルの派生形)である。

ブリュッゲルはこうして一五二五年から三十年頃の間、ネーデ

▲ 図7 「ピーテル・クック・ヴァン・アールストの肖像」

銅版画 ヴィーリックス刻 1572年



ルラントの一農村に生まれたが、どのような経緯によってアントウエルペンで画家の修業を始めたのかは全く知られていない。彼はピーテル・クック・ヴァン・アールスト(図7)の許で徒弟時代を送ったといわれるが、それは、ブリュッゲルが後にクックの娘と結婚したということからの推定である。また、ブリュッゲルが親方になる一年前の一五五〇年にクックが他界してしまったが、その折、クックの未亡人が彼女のメッヘレン市の実家近くにあるクラウト・ドリツイの工房での仕事を、ブリュッゲルに世話していることから師クック説が有力になったのである。先述のごとく、ブリュッゲルは一五五一年、アントウエルペンの画家組合で登録を済ませた後、当時の若い画家がそうするように、イタリア旅行に出かけた。十六世紀前半から中期にかけて、ネーデルラントではロマニストといって、イタリア、とくにローマで盛期ルネサンス様式を学び、その芸術様式を生地に伝播する画家がひじょうに人気を博していた。ブリュッゲルの師クックもそのひとりであり、それ以前でもフランス・フロリスなどは、美しい男女の裸身のうごめく神話画、歴史画、寓意画を画いて成功し、宮殿のように大邸宅に住むほどの一大財産を有したのである。

ブリュッゲルは一五五二年の五月初旬か中旬、フランスのリヨン、アルプスの峠モン・スニを通り、イタリアへ向った。彼がロ

ローマに滞在したこと、半島の南端メッシーナにまで下ったことなどは知られている。また往・帰路の二回、アルプスを越えをするとき、数多くの山岳風景を素描に残している。ヴァン・マンデルは「ブリューゲルはアルプスを越えながら、あらゆる山々や岩石を呑み込んで、それらを帰国後キャンヴァスやパネル（画板）に吐き出した」と述べている。ここで喚起したいことは、ブリューゲルがイタリア旅行からの帰国後、同時代のネーデルラントの画家とは違って、ほとんどイタリア美術の影響を受けなかったことである。わずかに、二、三の作品の中で、ローマで見物した古代遺跡のモチーフを利用してのみである。つまりイタリア旅行での最大の成果は、海抜零米地帯の平坦なフランドル地では全く見られない、巨大なアルプスの連峰に対峙し、その感銘を後に素描、版画、油彩画に山岳風景として十二分に活用したことである。そのため、様式的には彼は一貫してネーデルラントの伝統的手法を発展させたが、主題の上では彼の新しい人間観、自然観を導入したのである。

さて、イタリア旅行後、約八年間、ヒエロニムス・コックの版画屋で下絵を画いている中、ブリューゲルは当時の人気画家のひとりになった。と同時に一五五九年頃から、ブリューゲルは徐々に油彩画制作に転向し、「謝肉祭と四旬節」「ネーデルラントの

諺」「子供の遊戯」などを制作し、画家としての力量を発揮した。

やがて、その評判は、当時メッヘレンの宮殿に住むグランヴェル枢機卿の耳に届き、彼の保護をうけることになった。ちょうど時期を同じくして、ブリューゲルはコックの娘マイケンと結婚し、アントウエルペンからブリュッセルに移住する。しかしグランヴェル枢機卿は苛酷な宗教裁判を行ない、ネーデルラントの民衆の憎悪をかい、その職を解雇され、故国フランスのブザンソンに帰郷した。ブリューゲルは、強力なパトロンを失なったが、その後もアントウエルペン時代の知人たちの依頼で、「月曆画」シリーズや宗教画を画き、晩年は、一層、油彩画制作に没頭した。他方、時折、コックの版画の仕事をも継続し、「肥った台所」「痩せた台所」などの寓意版画を制作する。一五六七年頃、彼はブリュッセル市からアントウエルペンとブリュッセル間の運河の航路開通記念画（運河完成は一五六一年）を依頼された。しかし二年後の一五六九年、その作品（実はフレスコか、タピストリーの下絵か、油彩画かは不明）が未完成のまま、病死によって中断された。享年は四十歳か四十五歳と推定される。彼の知友で地理学者のアブラハム・オルテリウスは、「彼はその人生の花盛りで、われわれからの許から逝ってしまった」と悼んでいた。当時、遺児として五歳の長男ピーテル、一歳の次男ヤン、それに娘ひとりの

三人が残された。それゆえに実際に、二人の息子のために絵の手ほどきを施したのは、ブリュッゲルの姑マイケン・ヴェルフルストだったといわれる。彼女は『全ネーデルラント地誌』（一五六七年）の著者グイッシャルディーニから、「フランドルで画才ある四婦人のひとり」と賞讃される女流画家であった。

三、「子供の遊戯」の制作的背景

板、油彩、118×116cm 画面右下、署名と年記 BREVÉGEL
1560 ウィーン美術史美術館（図9）

画面には二百人近い子供たちが九十数種の遊びに興じている。

今日のフランドルの人々に聞くと、その半数位の遊びは即座に云い当てられるという。中には、「竹馬ごっこ」「馬乗り」「お人形ごっこ」など日本人のわれわれにも馴染み深いものもある。この画面から時間、空間を超え、子供の世界に普遍した遊びを見るのは楽しい限りである。しかしブリュッゲルは「シャボン玉」「独楽回し」「逆立ち」など、一見ほぼどの国の子供の世界にも共通した遊びを、単に見たままを客観的に絵画的言語で「記録」しようとしたのだろうか。またこの絵の依頼者はこの作品をどのような意図で画かせたのだろうか（次回からとくにこの問題を論じて

みたい）。

上述のヴァン・マンデルはその『画家伝』のブリュッゲルの章でこの絵の最初の所屬者について言及しておらず、たゞ「子供たちのあらゆる遊びを画いたもう一点の作品」と述べているのみである。この作品は一五九四年にはネーデルラント総督エルンスト大公の所蔵になったことは明らかである。大公はことのほかブリュッゲル作品の愛好者でかつ熱心な蒐集家であった。大公の遺産目録では画家名を書かず、多くは作品名の列挙であるが、「子供の遊戯」のみはブリュッゲルの名を挙げている。大公の死後、彼のすべての美術コレクションは兄弟の皇帝ルードルフ二世の所屬となり、こうして後のレオポルト・ヴィルヘルム大公の蒐集したブリュッゲル作品とともに、この「子供の遊戯」も今日、ウィーン的美術史美術館に所蔵されることになった。

つぎに、この絵の制作された一五六〇年前後のブリュッゲルの「創作的姿勢」を考察しなければならない。

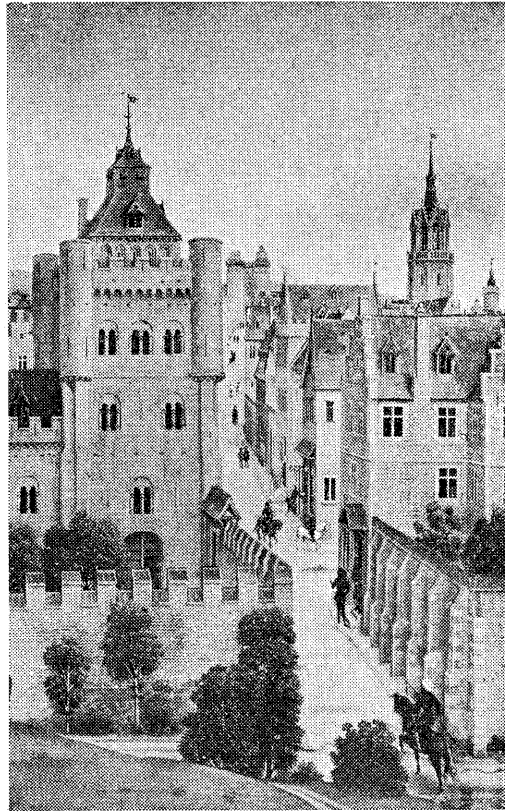
ブリュッゲルの作品で、制作年代の知られているもっとも初期の作品は、一五五三年の「テベリアの海で弟子たちの前に現われるキリスト」である。たしかこの作品はまだ先人ヨアヒム・パティニールの様式を踏襲した幻想的な河口風景であり、この「子供の遊戯」とは何らの共通性がない。しかしつぎの段階に制作され



▲ 図 8 ピーテル・ブリューゲル「謝肉祭と四旬節の喧嘩」
油彩 1559年 ウィーン 美術史美術館



▲ 図 9 ピーテル・ブリューゲル「子供の遊戯」
油彩 1560年 ウィーン 美術史美術館



▲ 図10 ロヒール・ヴァン・デル・ウエイデン「ブラデリンの祭壇画」(部分) 油彩 1456年頃 ベルリン・ダーレン 国立美術館

したい。「子供の遊戯」でも中景に方形の建物と町並が望まれ、同じく鳥瞰図で画かれている。中央の建物はイタリア・ルネサンスのパラッツォ(宮殿)風でもあり、また十字架枠の窓は典型的なフランドル・ゴシック、さらに庭に面したロココ(回廊)はゴシックの尖頭アーチとロマネスクの柱頭をもつ束ね柱などで出来ているので、全体はいわば「合成様式」の建物といえよう。なお建物の入口には月間行事のカレンダーがあることから、これは市庁舎かもしれない。さらに、右上方の町並の遠近図法は、十五世紀のロヒール・ヴァン・デル・ウエイデ

た前述の一五五九年の「謝肉祭と四旬節の喧嘩」(図8)は多くの点で、「子供の遊戯」と関連性をもっている。

まず外形的には画面の縦・横の大きさがほぼ同じこと、さらに群衆構図であることである。とくに「謝肉祭と四旬節の喧嘩」の舞台が教会前の広場であり、居酒屋や十数軒の市民の町並がみられ、それが鳥瞰図風に上から見下ろした構図であることに注目

ンの「ブラデリンの祭壇画」(図10)に先行例をみることでできよう。ところで、「謝肉祭と四旬節の喧嘩」も「子供の遊戯」も画面上方が建物の屋根で切断されている。ただし、前者と違って後者の方が、風景を導入しているところが新しい展開であろう。

「子供の遊戯」では、町並のつき当りの教会にむかって対角線上に位置づけられ右奥方の市街図と対角的に、左奥方では同じく対

角線に走る川、三本の樹、草原のある田園風景という風に自然が画かれている。このように人間の生活と自然との融合が、ブリュッゲルの一五六〇年代の新しい展開とみなされよう。

ほかに、「四旬節と謝肉祭の喧嘩」とは図像的にも共通点があり、あたかも両作品が一对をなしているように思える。それは「謝肉祭と四旬節の喧嘩」が「大人の遊戯」を表わしているとも解されるからである。四旬節というのは復活祭までの四十日間、肉を断ち、懺悔生活を行う期間であるが、その前日、人々は謝肉祭といって、大酒を飲み、ご馳走を食べ、野外劇を楽しみ、仮装をして大騒ぎをする。前景左側には大樽にまたがって、丸焼きにした豚の頭を串にさし、パイを頭上にのせた肥つちよの「謝肉祭」の擬人像がいる。彼は仮装行列を引率する。その背後では寸劇「汚れた花嫁」の上演。右側では瘦せた「四旬節」の擬人像が頭上に蜂よけ帽、手に二匹のニシンを置いたパン焼用のシャベルをもち、謝肉祭の代表に挑戦する。背後には子供たちがクレップポールトと呼ぶ一種のがらがらの鳴物を手にして、はやし立てる。これはすでに十六世紀前半に彩飾されたフランドルの時禱書の余白（次回参照）にも見い出せる古い鳴物玩具である。こうしてブリュッゲルは快楽と禁欲という相対する人間精神を寓意画風に画き、フランドルの祝祭の習慣を民俗学的に伝えている。まさしく

これが大人たちの楽しみであり、遊戯なのである。
最後に人物配置と色彩について論じてみよう。

一五五九年の「謝肉祭と四旬節の喧嘩」「ネーデルラントの謎」と同様、一五六〇年の「子供の遊戯」では無数の人物が画面いっぱいに点在している。しかも三作品とも、一人ないし二人、また数人のグループが孤立した形で、他とは無関係に個々の営みに没頭している。中には帽子を目深に被り顔の見えない人物、また後姿しか見えない人物も少なくない。しかし決してこの作品も拡散的でバラバラという印象を与えず、色彩によって統一されている。ハンス・ゼーデルマイヤはこれをブリュッゲル芸術の根源性のひとつである「マッキア」の性格と解した。^{註5}ゼーデルマイヤ自身、一八六八年のインブリアーニの小著で述べられた命題「絵は絵画的イデー、つまりマッキアをあらわさねばならない」に啓発されたのである。伊語のマッキアとは、一般には汚点、しみ、よごれを意味する。しかしここでは、芸術家がある情景を一瞬眺めたとき、その心に残像として映えた強烈な色彩の模様、「色斑」をいう。ブリュッゲルが教会前の広場で謝肉祭を祝う民衆、村の一隅で仕事に没頭する農民、市庁舎前の広場で遊ぶ子供たちを目標撃したとき、彼を強く印象づけたのは、個々の行為の内容というよりは、青、赤、黄色、白、茶色などの色斑だったのである。

「子供の遊戯」でもこうした限られた色が、遠近による濃淡（色彩遠近法によると遠くものはより淡色で画く）に関係なく、ほとんど同じ強度、同じ色合いで繰り返されている。しかも身体を包む衣服の色は、イタリア・ルネサンス風に身体の起伏や構造を暗示させるこまかな陰影法ではなく、むしろ平坦な「色面」として画かれている。ゆえにマッキアの効果を上げるために、ブリュールは子供の身体を円筒形や円錐形などに単純化し、帽子も多く丸帽を、そして樽、丸太、棒など幾何学的な基本形態のモチーフを優先させた。

それによって、「謝肉祭と四旬節の喧嘩」や「ネーデルラントの諺」での群衆構図と同様、この「子供の遊戯」でも子供たちの姿に統一性が与えられ、高い芸術的価値が与えられたのである。

注1 モンターノについて近年すぐれた研究書が上梓された。

B. Rakers, *Bartio Arias Montano*, London, 1972.

注2 「誰でも」については拙論「ブリュールの『誰でも』」

『三彩』一九七四年四月号 七二―八一頁。六月号 六

〇―六九頁）を参照されたい。

注3 Karel van Mander, *Het Schilder-Boeck*, Haarlem 1604.

引用文は吉川逸治、森洋子共著『ボス、ブリュール』

（集英社、一九七七年）八六頁。

注4 ブリュールのイタリア旅行については拙論「ブリュールとイタリア旅行」『三彩』一九七三年十二月号 七九―八一頁）を参照されたい。

注5 Hans Sedlmayr, "Die Maelia Bruegels", *Epochen und Werke*, 1959, Band I, pp. 274-318.

高階秀爾『美の思索家たち』（新潮社、一九六七年）にゼーデルマイヤの「マッキア論」の解説がある。

なお筆者は『みづゑ』一九六八年夏号のブリュール論でこの論文を紹介した。

（東京工芸大学）

〔史料紹介〕

邦訳 日葡辞書②

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

B字で始まる語

バイ(貝)

海の貝類の一種。また、子どもたちが独楽(こま)として使う、この貝または巻貝の殻。

(例) バイヲ ウツ、マウス(貝を打つ、または回す)この種の独楽を回して遊ぶ。

バッシ(末子)

スエノ コ(末の子)すなわち、オトゴ(乙子)最後の

子。

ベウシ(苗子)

ナエコ(苗子)二歳から三歳までの幼児。

ベップク(別腹)

ベチノ ハラ(別の腹)他の腹、すなわち、違う別の母。

(例) ベップクノ コ(別腹の子)父親は同じで母親が違っている子。

ベッシ(別子)

ベチノ コ(別の子)他の子、すなわち庶子。

ビジャク(微弱)

スコシ ヨワシ (微し弱し) 弱さ、または、年の行かぬ者の力弱さ。

ボボ (ぼぼ)

女の陰部。婦女子の使う言葉。

ボフク (母腹)

母の胎内。

ボギ (母儀)

母に同じ。

ボタイ (母胎)

母の胎内。

ブイク (撫育)

ナデ ヤシナウ (撫で育ぶ) 甘やかしゃ、いつくしみ。

(例) ブイクスル (撫育する) 甘やかす、いつくしむ。

ブモ (父母)

父と母と。

ブキリヨク (無気力)

キリヨク ナシ (気力無し) 生れつき気弱なこと。

ブリブリ (ぶりぶり)

端に縄とか紐とかを結びつけた、真つ直ぐな羊飼いの杖のようなもの。それを投石器のように空中でぐるぐる振り回

して、打球遊びのように、ある毬を打つ遊び。

(例) ブリブリデ ウツ (ぶりぶりで打つ) 毬打ちの競技をする、すなわち、上述のやり方で打球遊びをする。

ブタイセツ (無大切)

愛情のないこと。

(例) ブタイセツナ モノナド (無大切な者、など) 愛情の無い者など。

ブシ、スル (撫し、する)

ナズル (撫づる) に同じ。かわいがる、あるいは、甘やかす。

(例) ソノコオ ブシテ ワルシ (その子を撫して悪し) 文書語。その子どもをかわいがっていはよろしくない。

C 字で始まる語

カカ (かか)

母に同じ。これは子供の言葉である。また、尊敬すべき婦人、あるいは年長で一家の主婦のような婦人の意に取られる。

カカリ、ル、ツタ（掛、懸、係かり、る、った）

扶養される、または、ほかの人と一緒に生活する。

(例) オヤニ カカル（親にかかる）子どもが、まだ親の

扶養を受けて一緒にいる、などの意。

カクレゴ（隠れご）

互いに隠れて探しあいをする、子供の遊びの一種。

カドウ（歌童）

ウタフ ワランベ（歌ふ童）歌を歌う子ども。

カイシヤク（介錯）

切腹した人の首を斬ってやって、その人が死ぬのに力を貸すこと。また、ある人、たとえば、養育係の人などが、貴

人の子供の世話をしたり、教導したりなどして力添えすること。

カミ（髪）

頭髪。

(例) カミヲ ナヅル（髪を撫づる）頭に手を置いて撫で

かわいがる。

カミ（上・頭）

頭。

(例) カミヲ タルル（髪を垂るる）一歳から三歳までの

乳児の頭を剃る。

(訳註) ※本来、カミ（髪）の条下にあるべきもの。

カミタレ（髪垂れ）

(例) カミタレノ イワイヲ スル（髪垂れの祝をする）

乳児の頭髪を初めて剃った時に祝いすること。

カミオキ（髪置き）

(例) カミヲ キヲ スル（髪置をする）三歳以上の子供が

その時までは剃り落としていた頭髪を、そのまま伸ばす

こと。伸ばし始めをする日には、親が或る祝いをする。

カンゲ（瘡気）

脾臓の病気のような、子どもの病気。

(訳註) 1) 日仏辞書は dysenterie（赤痢）と訳している。

カラコ（唐子）

シナの子供。

カラコノエ（唐子の絵）

頭のまん中で髪を結ったシナの子供を描いてある絵。

カラヨナナ（空女）

子を孕まない女（うますめ）。

桜の季節が終ると、若葉の緑が目には著き始める。樹木の少なくなった都会でも、四月の末から五月にかけては、あちこちから萌え出す思いがけない緑に、こんな所に、こんな木が生えていたのかと、驚かされることも少なくない。

緑の目立つこの季節に、「色彩」をめぐって、幾つかのエッセーを集めてみた。人と色とのかわりは、単なる光の波長の差異への反応ではない。それ以上に、それぞれの色に喚起されるイメージーション、或いは、色に託されてきた象徴的な意味などに、より多くを負うていると言えようである。

嬰兒は、「赤子」でこそあれ、緑色とは縁遠いものを、「みどりご」と呼び習わし、つややかな女の髪が、「みどりの黒髪」と賞めそやされてきたのは、その何よりの証である。

絵の具や化粧などで外容を覆うことを、「色を塗る」とか「色を作る」などと言うことがある。これは、人間にとつて、色が、常に、ものの外面と密着して現われることを物語つてもいる。目に見えるものであり、明かるい光の下でさえあれば、直ちに識別可能であるという色の性格が、優れて「外面的」に位置づけられるのであろうか。

と同時に、色は、ものの内的状態の「徴」でもある。例えば、「疲労の色が濃い」「秋の色が深い」などと言うとき、この場合の「色」は、外に現われて人の目をとらえる「徴」ではあるが、表わされるものは、「疲労」「秋の気配」などと言う内面的ことがらなのである。

「色」や「形」は、目に見えるものであり、外側のものでもある。それでいて、内側のものとの関係なしには存在し得ないのが、人間世界の面白さであろう。(和)

幼児の教育 第八十巻 第五号

五月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年 四月二十五日 印刷
昭和五十六年 五月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 津 守 真

111 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします

昭和56年度

東西ヨーロッパ幼児教育視察旅行 15日間

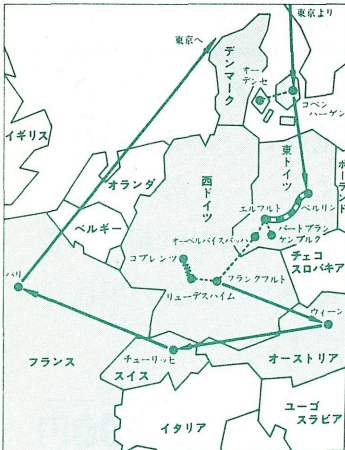
8月8日～8月22日



花束で迎えてくれる園児たち



母と幼な子の像とフレーベル先生の生家



経路略図

ヨーロッパの自然とメルヘンのふるさとへ

フレーベル先生の遺跡を訪ねて好評の“フレーベル・ツアー”も、今年で第6回を迎えます。明年4月21日は、フレーベル先生生誕200年記念行事が現地で予定され、現在遺跡等の整備も大分進み、楽しい視察旅行が期待されます。

幼児教育のルーツをたどりながらヨーロッパの自然とメルヘンのふるさとへ、今年も皆様をお誘いいたします。

経路

東京→コペンハーゲン→オーデンセ→東西ベルリン→エルフルト→パートブランケンブルク→オーベルバイスパッサ→フランクフルト→リュエデスハイム→コブレンツ→ウィーン→チューリッヒ→パリ→東京

期間

昭和56年8月8日(土)～8月22日(土)

費用

748,000円 (ローンも可能です)

申込〆切

昭和56年6月20日(土)

人員

30名 (定員になり次第〆切らせていただきます)



主催

フレーベル館現代幼児教育研究会
日本交通公社 国内線 団体旅行新宿支店

★お問い合わせは

フレーベル館 現幼研ヨーロッパ視察旅行係

東京都千代田区神田小川町3-1

〒101 ☎ 03 (292) 7781

くわしい資料をお届けいたします。

新刊案内

"よい保育"を見直してみましよう。

私の保育どこが問題？

■本吉圓子・笠間典美 共著



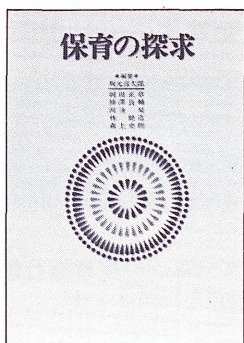
今まで「よい」と考えられて来た保育が実は子どもを馬鹿にし、駄目にすると言われたらどうしますか？保育日誌を通して、その問題点を指摘し、自主的な子どもを育てる保育の具体例を語ります。

B6判/304頁 送料250円 定価**1,200円**

新たなる保育を探る

保育の探求

■編集 坂元彦太郎・岡田正章・神澤良輔・河邊 昶・林 健造・森上史朗



泥まみれの現実のなかに、幼児の豊かな可能性を信じていく——このロマンこそ、生きた教育の原点ではないか。本書は、幼児の実体を直視し、保育の現代化を探る近来の好著です。

A5判/428頁 送料300円 定価**2,000円**

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館